



お茶大子ども学
ブックレット

Vol. 6

第8回
ECCELL 子ども学シンポジウム
2014.11.21

鼎談「子ども・戦争・歴史」

講演者：

本田 和子 氏

(お茶の水女子大学 元学長)

宮澤 康人 氏

(東京大学 名誉教授)

山本 秀行 氏

(こども教育宝仙大学 学長)



「お茶大子ども学ブックレット」について

このブックレットは、お茶の水女子大学ECCELLプロジェクト（国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」Early Childhood Care/Education and Lifelong Learning）が発行するものです。本事業は、学生と社会人がともに子ども学すること、子ども学を生涯学び直すことをとおして、大人が成長していく場を創造することをめざしています。ECCELLで企画した子ども学シンポジウム、保育フォーラム、特別講義などの記録を少しでも多くの方々と共有するために、ブックレットの形で発行し、学びの輪を広げたいと考えます。

※『お茶大子ども学ブックレット』は株式会社ベネッセコーポレーション寄附金により作成されました。

目次

【第一部】鼎談「子ども・戦争・歴史」

1. シンポジウム 趣旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
2. 開会挨拶および講演者紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
3. 本田 和子氏講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
4. 宮澤 康人氏講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
5. 山本 秀行氏講演・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
6. リプライと討論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
7. 会場から寄せられたその他の質問・感想・・・・・・・・・・・・・60

【第二部】鼎談に寄せて

1. 本田 和子氏特別寄稿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
 質問に対する私見
2. 宮澤 康人氏特別寄稿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
 教育学の〈戦前〉責任とシンポジウム「子どもと戦争」によせて
3. 写真資料で見る「戦時下の保育」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
 「戦時下の保育」東京女子高等師範学校附属幼稚園資料特別展

【資料】

- 第8回 ECCELL 子ども学シンポジウム案内チラシ・・・・・・・・・・・・・80
- お茶大子ども学ブックレット バックナンバールー一覧・・・・・・・・・・・・・79

第8回 ECCELL子ども学シンポジウム

テーマ：鼎談「子ども・戦争・歴史」

日時：2014年11月21日（金）13：20～14：50

会場：お茶の水女子大学 共通講義棟2号館2階201室

講演者：本田 和子 氏（お茶の水女子大学 元学長）

宮澤 康人 氏（東京大学 名誉教授）

山本 秀行 氏（こども教育宝仙大学 学長）

司会：小玉 亮子 氏（お茶の水女子大学大学院 教授）

共催：科研費基盤研究（C）「20世紀前半のドイツにおける幼児教育の制度化と家族に

関する社会史的研究（研究代表者：小玉亮子）」

後援：幼児教育史学会

【第一部】

鼎談「子ども・戦争・歴史」

1. シンポジウム 趣旨

歴史の中で、子どもたちは必ずしも主人公ではなかったように思います。例えば、私たちが学んできた歴史教科書をみてみましょう。400ページ近くある歴史教科書の中に、ほんのわずかに点在する子どもの姿をようやく見つけることができる、というような状況です。しかし実際には、子どもたちは、いつの時代にも、生まれ、生活し、そして大人になっていきました。大人たちは、子どもたちを見守り、育ててきました。これまで必ずしも歴史の主人公ではなかったけれども、歴史の中で確かに生きてきた子どもたちのことをあらためて考えてみたいと思つたのが、この鼎談のきっかけです。

今回のテーマは、「子ども・戦争・歴史」という三題話です。歴史の中の子どもたちについてどういった視点から議論できるのだろうか、と考え、今回は戦争という言葉を、キーワードの一つにしてみました。戦争というキーワードを考えたのは、今年が1914年からちょうど100年目に当たるというのがその理由の一つです。100年前の1914年6月にセルビアでオーストリアとハンガリーの皇位継承者夫妻が殺害されるという事件がおこり、それをきっかけに次から次にヨーロッパ列強が戦線に突入していきました。そして、半年も経たないうちに、ヨーロッパ全土をまきこんだ第一次世界大戦となり、そのうち、第二次世界大戦が勃発することになります。現代社会のキーワードであるグローバル社会は、皮肉なことに戦争という形で目に見えるものとなり、もちろん日本もまた例外ではありませんでした。

この第一次世界大戦と第二次世界大戦の間に、ドイツの芸術家ケーテ・コルビッツが一枚の子ども

の絵を描いています（「ドイツの子どもたちは飢えている」1923年）。そこに描かれているのは、とても子どもらしい瞳を持った子どもたちですが、私たちのなじみのある子どもイメージからかけ離れた子どものような気がします。しかし同時に、彼らの瞳から目をそらすことはできないようにも思うのです。

現在、戦争の記憶が遠いものとなっていくなかで、だからこそ、今、戦争と子どもというテーマは重要性を持つようにも思います。戦争の時代に子どもたちはどう生きたのか、そして、今、私たちは何を考えることが求められるのか、三人の先生方のお話をお聞きしたいと考えました。

（文責 小玉亮子）

2. 開会挨拶および講演者紹介

小玉 皆様、本日はこの会にお集りいただき、ありがとうございます。司会をいたします小玉です。どうぞよろしくお願いたします。皆様のお手元のちらしに今回の趣旨を掲載しておりますが、改めて、司会より、今回の趣旨について、少し説明させていただきますたいとおもいます。

この鼎談のテーマを「子ども・戦争・歴史」という三題漸としたいと思いましたが、子どもに焦点をあてた研究をされてきた本田先生のお話を、ぜひお聴きしたいと考えたからです。本田先生は、1981年に『異文化としての子ども』を上梓され、子ども研究の第一人者として常に子ども研究の最前線で研究を発表されてきたことは皆さんご存知のところですが、本田先生のまなざしは、歴史の中の子どもたち、あるいは時代の中に生きた子どもたちでありました。第一次世界大戦勃発から100年目の今年、「子ども・戦争・歴史」というテーマでお話をお願いできないでしょうか、と本田先生に申し上げたところ、先生ご自身は戦争をテーマに研究してきたわけではないでしょうかとおっしゃりましたが、「今、とても重要なテーマです」ともおっしゃっていただきました。そこから、今回の鼎談の計画をたててまいりました。そして、本田先生から、せっかくなので、複数の方の視点から「子ども・戦争・歴史」というテーマを考えてみてはどうか、というご示唆をいただきました。今回は、本田先生が放送大学で一緒に授業を担当された宮澤康人先生と、本学で本田学長体制を副学長として支えてきた山本先生をお招きすることとしました。

宮澤先生は、西洋教育史をご専門として研究を続けて来られた先生で、教育学という分野で、従来

の教育学の枠組みを捉え直すような、「子どもと大人の関係」をテーマに歴史的分析をしてこられた。山本秀行先生は、ナチス期を中心にドイツの近現代史がご専門で、ドイツの社会史、民衆の歴史の研究を続けて来られた先生です。

それでは、最初に本田先生から、次に宮澤先生、そして山本先生にお話をいただいて、最初の90分間は先生方のお話をお聞きし、その後、休憩を挟みながら、できましたら、一時間ぐらい議論をする時間として進めさせていただきます。どうぞよろしく願います。

では本田先生からお話をお願いいたします。

3. 本田 和子氏講演

お茶の水女子大学 元学長

著書：『それでも子どもは減っていく』（筑摩書房、2009）

『異文化としての子ども』（紀伊國屋書店、1982）他

戦争の経験を語るということ

「みなさま、こんにちは」といってフロアにお声をかけるよりも、お座りの先生方に「どうぞよろしく」と申しあげた方がよろしいのだろうと思いますが、本田でございます。私は昭和6年に生まれました。満州事変が始まった年です。満州事変の始まった年に生まれて、ずっと戦争中に子ども時代

を過ごしました。満14歳の時に第二次世界大戦、あの頃は大東亜戦争と呼んでいましたが、太平洋戦争が終わりました。子どもとして戦争を体験した人間であることも確かです。ただし「戦争と子ども」という題について特別研究したことはない。戦争と子どもは大切なテーマだと思うけれども、特にそういうことに関心をもって研究したことはない。ただ戦争中、子どもであったことは確かだと申しましたら、その体験を話せと。

体験は事実、起こったことをそのまま伝えられるかということ、そうではないと思います。体験は記憶に基づいて語られるわけです。記憶というのは大変個人的なもので、他者との共有を拒みます。記憶を語るというのは自己中心的な行為かもしれないと思っています。しかも戦後69年という長い年月がたっていますから、修正されたり、抑圧されたり、無意識のうちに忘れてしまったたりすることもあるかもしれませんかと思うんです。したがって、体験を語ることにどういう意味があるのかということ。個人の体験を語るということは歴史をつむぐことと関係するのかどうか、山本先生に、あとでお教えいただきたい。山本先生に課題を出しておきたいと思っています。そういうことで、私が体験を語る例としてここにいるということだけを申しあげて。ただし、何しろ14年間、戦争といっしょに暮らしていたわけで体験を語るといっても語りはじめるとキリがない。

そこで三つに絞ってお話申しあげようかと思っています。一つは私が戦争とからめて大変よく印象づけられたこと。もう一つは戦争によって学校教育の中で特に印象的に変わったこと、訓練させられたこと。最後に学校の外でいろいろな影響を受けたこと。私の戦争イメージというのは学校の外で受けた体験というのが正確かもしれないと思っていますが、それについてお話申し上げたい。学校の外で

の影響に関しては、宮澤先生が「たて・よこ・ナナメの教育環境」を主張しておられますから、あとで宮澤先生のお考えを伺えればいいと。それぞれの先生方に課題を差し上げて私の話は終わったかなと思います。まだ時間が残っていますので、私の体験を少し話させていただきます。

「へえ、戦争か」

私が小学校1年生の時、昭和12年ですが、中国との戦争が始まりました。日中戦争。あの頃、「支那事変」と呼んでおりました。ですけども、あの頃の記憶がありません。平穩無事な子ども時代を過ごしていたのだらうと思います。父が軍人でしたから、連隊を率いて中国大陸に出征したということがありました。それにしても、戦争のことをあまり考えなかった。ほやっとした子ども時代を過ごしていたんですね。

戦争を非常に意識したのは昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まってからでした。そこで最初にびっくりしたのが、男の子と女の子の戦争にかかわるかかわり方の違いでした。朝起きままして歯を磨いていたら、ラジオがなにか騒いでいる。アナウンサーが興奮した声で何かいっている。当時、テレビはございません。ラジオの前に歯ブラシをもって立ったんです。「臨時ニュースを申し上げます、臨時ニュースを申し上げます」とやっています。「大本営陸海軍報道部発表。8日未明、帝国陸海軍は西太平洋において英国及び米国と戦闘状態に入れり。繰り返します」とやっているわけです。よく覚えておりますでしょ。記憶力はいい方なんです。でもその時、私、何も感激はしなかった。興奮もしなかった。「へえ、戦争か」と思っただけなんです。

貼り出された男の子の作文

ところが学校にいきましたら男の子はそうじゃなかった。大変興奮して騒いでいた。戦争のことを話題にして。その時、初めてびっくりして、それまではいっしょに勉強して、男の子と女の子の違い、今だったらジェンダー問題というでしょうけど、そういうことをあまり考えたことはなかったんです。男の子たちは戦争を非常に身近なものに感じているらしくて、興奮してしゃべっている。女の子はいつもと同じように遊んでいるんですね。授業が始まって、天皇が宣戦布告の大詔を発表された。「天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭二忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス」という文章を聞いても、別に私は「へえ」と思っていた。

その後、作文を書かされました。大詔を奉戴して、何を感じたか。正直いって何も感じなかったのを書くことに困りましたが、「アメリカにしても、イギリスにしても大変大きな国だから、大きな国と戦争するのは大変だろうから、がんばれ」と。ありきたりのことを書いたんです。2、3日しましたら優れた作文が廊下に貼り出されて、私は作文少女だったから、そういう時は、よく貼り出される方だったんですね。その時は私の名前はないんです。ないどころか、女の子の作文が一つもない。男の子の作文が3人出ていました。よく覚えているのは、玉置君、名前まで覚えていますが、玉置隆くんといい、よくできる優等生で、級長さんをしている優しい、親切だったものですから、女の子も仲良くしていたんです。その人の作文が出ていた。「日米ついに闘えりという報に接し、はや心も心にあらず。床を蹴って飛び起きた」という書き出しなんです。それを見て愕然としたんですね。玉置君がポんと床を蹴って飛び起きたかどうか知りませんが、ですけど、そういう書き出しで文章を書か

ないといけないという、心の構えに男の子たちがいたということにびっくりしたんです。私は「へえ、そうか、戦争か」というくらいにしか感じなかった。学校にきて、あまり興奮している女の子はいなかった。しかし男の子は「床を蹴って飛び起きた」という構えで文章を書かないといけないような状態に構えがなっていたのかと大変びっくりいたしました。

九軍神

戦争は男の子と女の子の違いを際立たせるものなのかなと、戦争に対するかかわり方が男の子と女の子で違うのかなと、それは家庭教育の問題なのかと、いろんなことをパツパツと断片的に考えました。もしかしたら、これは極めて個人的なことかもしれませんが、ですけれども体験というのは個人的なものでございます。ちょっとお赦しいただきたいと思いますが、男の子はそれからたびたびそういうことがございました。

真珠湾攻撃がその日に行われて、特殊潜航艇という潜水艦に乗って5隻の潜水艦が海の底深く潜っていつて、真珠湾に停留していたアメリカの戦艦を攻撃した。次の日の新聞には一面に「九軍神」、9人の若い軍人たちの写真がパツと出たんです。それをみて別に感心しただけで「皆若いんだな、えらいんだな」と。ところが男の子の中には違う反応をしていた子がいたんです。どういう反応か。「1隻の潜水艦に2人乗るのに、9人というのはおかしいじゃないか。5隻の潜水艦が潜っていったんだから10人いないといけない。9人はおかしいじゃないか。一人、出発直前にやめた人がいるのかもしれない。しかし、そういう卑怯な人は日本の軍人にはいない筈だ。」とか、ワイワイガヤガヤいつて

いるんです。それもびっくりいたしました。男の子って戦争に対する入り込み方が違うのかしらと思つたんですね。自分の身近なこととして感じているから気がつくのかもしれない。私は「へえ、9人の軍神か」と思っていただけなんです。周りの女の子もそんな反応でした。男の子と女の子の違いを、なぜかその時、非常に鮮烈に感じました。開戦の前後のことなんです。そういうことは後からもたびたび出てきましたけども。

分列行進と身体

二つ目に私が小学校5年の時に国民学校となりました。「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為目的トス」という目的のもとに、カリキュラムも変わって、教科書も変わったりました。国民学校に変わって一番何が変わったか。教科書も多少変わりましたが、一番変わったのは時間割の中に武道とか入ってききましたが、一番大きな影響力をもつたのは分列行進なんです。昼休みが終わりますと、4年生以上だったと思いますが、上級学年の生徒が校庭に集められる。「6組、分列前へ進め」と行進を始めるわけです。足並み揃えて手をふって「オイチニ、オイチニ」とやるわけです。分列というのがわからない。けれどさせられますから、したんです。級長とか班長が交代で号令をかける。号令をかける番が回ってきまして「5年3組、分列に前へ進め。」向こうの方から「5年3組、声が小さい」とか先生にいわれる。私は体中から声をしほりだして「分列に前へ進め」とやりながら、ぐるぐる回る。毎日させられたんです。

これ何のためにしているんだろうとチラッと思いました。ほんとにチラッと、です。男の子は軍隊に

入ると兵隊さんはこういうふうにも動くかもしれない。しかしなんで女の子がさせられるんだろうと思っ
ていましたが、それ以上つつこんで考えることをしませんでした。それから先生に質問もしませんでした
た。後で考えたら、つつこんで考えないということ、先生に質問もしないということこそ、分列行進の
成果なんですね。つまり命令に従うことを体が覚えてしまった。命令に従って、あまり疑問をもたない
で、誰の命令というのではないんです、従うという行動パターンを体が覚えてしまったと思っただんです。
2003年に喜安朗さんというユニークな歴史学者ですが、『天皇の影をめぐるある少年の物語（刀
水書房、2003年）』というのをお出しになったんです。喜安さんは昭和6年生まれで、私と同じ
ように戦争中に子ども時代を過ごした方なんです。その方のご本を読むと、分列行進のことを丁寧
書いていらして、ミシエール・フーコーなどを引いて「体が秩序だっっていくプロセスである」という
説明をしていらっしやる。なるほどと思いましたね。ただそこで天皇がしばしば出てくる。天皇を中
心にした神がかりの状態になる。戦後日本人が天皇制をもっていることは、天皇イデオロギーを内面
化しているということではないんじゃないか。それは身振りの問題であり、ことばの問題であると説
明されている。大変面白いと思いましたが、天皇制とのかかわりがわからなかった。分列行進をくり
かえすことで、体が制度化されていくことはわかるけれども、天皇と密接に結びつくことがわからな
かったのです、それが男の子と女の子の違いなのか、あるいは喜安さんご本人の問題なのか、個人の
問題なのか、わかりません。あとで山本先生からは、喜安さんとお親しいようですからお話を聞けれ
ばと思います。分列行進をしつこいほど繰り返されたことが一つ。国民学校の大きな体験です。

悲しげな軍歌

もう一つ、これは学校外の体験ですが、私の戦争イメージをつくった非常に大きな影響力をもったものについてお話しします。戦時中、軍歌がたくさんつくられました。面白いことにヒットした歌は大抵、歌詞を募集している。たとえば、毎日新聞社が歌詞を募集すると2万何千も応募してくる。1等賞を選ぶ、曲はプロの作曲家がつけていたようですが。歌詞はアマチュアから選ぶ。毎日新聞が進軍の歌を募集した。第1等と佳作となった歌があった。『露営の歌（藪内喜一郎作詞、古関裕而作曲、1937年）』が大ヒットします。当時はラジオとかレコードですね。レコードが60万枚も売れたというので大ヒットです。歌詞に応募して1等になった人が2000円の賞金をもらおう。当時の2000円は大変なお金です。サラリーマンが1年働いた年収よりも多かったそうですから。こぞつて皆が応募したことがわかりますね。『露営の歌』が非常にヒットした。1等になった『進軍の歌（本多信壽作詞、辻順治作曲、1937年）』は「雲わきあがるこの朝（あした）旭日のもと 敢然と正義に立てり 大日本とれ 膂懲（ようちよう）の 銃と剣」という歌詞です。露営の歌は「勝ってくるぞと勇ましく、誓って家を出たからは」というあの歌ですね。「進軍の歌」はヒットしなかった。ほとんど歌われなかった歌なんです。ところが「露営の歌」は大変ヒットしてあちこちで歌われた。

次いで朝日新聞がやったのが「戦場の兵士に感謝する」という歌の募集だった。何万人が応募して1等選ばれたのが女性の主婦の方です。「父よ、あなたは強かった。兜（かぶと）も焦がす 炎熱を敵の屍（かばね）とともに寝て 泥水すすり 草を噛み 荒れた山河を 幾千里 よくこそ撃つて 下さった（『父よあなたは強かった』福田節作詞、明本京静作曲、1939年）」。それが1等賞になり大ヒ

ットして、あっちでもこっちでも歌われた。ラジオをつけると流れてくるというようなことでした。どこが募集したのか知りませんが、『出征兵士を送る歌（生田大三郎作詞、林伊佐緒作曲、1939年）』は「我が大君（おおきみ）に召されたる命榮（は）えある朝ほらけ讚（たた）えて送る一億の歓呼は高く天を衝（つ）くいざ征けつわもの日本（にっぽん）男児」という歌なんです。大変きれいな歌だと思います。

面白いことにヒットした3つの歌は、いずれもちよつとも悲しげな旋律なんです。戦争の歌ですから元氣よく皆を鼓舞するような曲がつけられてもよさそうなものを、ちよつと陰影をもったホ短調かなんかだったと思いますけど、悲しげな歌なんです。暗い気持ちになるような歌が大ヒットしている。私もそれに影響されて、きれいな歌だなと思いつつながら何となく歌ったり、覚えてしまいました。歌詞はよくわかりませんでした。「命映えある朝ほらけ」なんて、どんな朝ほらけか、わかりませんよね。きれいだなと思つて歌っていた。それらの歌から私の戦争イメージは出来上がりました。戦争というものが美しいものである、聖なる戦いであるというイメージを払拭することかできないんです。とにかくそういうイメージをしつかりもつてしまった。学校で教わつたというより歌の影響だつたらうと思います。旋律の影響でもあつたらうと。

サイパン玉砕の歌

これをめぐっては後日談があるんですけど、戦争末期にサイパン島が玉砕いたします。米軍に占領されて日本軍はほとんど全滅してしまつた。日本の守備隊が死んだだけではなく、そこに住んでいた

統治していた島ですから民間人も崖から飛び下りて自殺したわけですね。アメリカが「バンザイ・クリフ」「シューサイド・クリフ」と名付けた海に面している高い断崖です。アメリカ兵がフィルムにおさめていた。ビデオのない時代ですから8ミリか16ミリだろうと思うんですが、戦後、大人になつていましたが、そのフィルムを見たことがあります。草むらがゆらゆらと揺れる。何か獣でも出てくるのかなと思つていたら、草をかき分けてごそごそと女の人が一人出てくる。髪がぼさぼさで破れたような着物を着ている。崖から無造作にボンと飛び下りた。「天皇陛下万歳」とかもうわずに。その人が高い崖から落下していくところをアメリカ軍の映写機がしっかりとらえている。ずっと落ちていつて海に落ちて死んだ。それを見て、愕然といたしました。

『サイパン殉国の歌（大木惇夫作詞、山田耕作作曲、1944年）』というのがございました。それも大変心をギョツとつかまれるような気持ちで覚えた歌なんです。その二番は「泣け、怒れ、讃えよ褒めよ、讃えよ褒めよ。武器とりて起ち得る者は武器とりて皆戦えり。後ろには大和撫子、紅に咲きて匂いぬ」。男の人は皆武器をとつて闘つて死んでいった。残つたのは女性だけである。女性たちが毅然と立ち上がつてきれいに死んでいったという歌ですね。とつてもそれに感激したんです。女の人が戦争に参加するのはこういうことなのかしらと、「後ろには大和撫子、紅に咲きて匂いぬ」。好きで口ずさんでいた。何年かたつて映像を見て「こういうことだったのか」と思いました。ボロを着たおばさんが草むらから出てきてボンと飛び下りる。崖を落ちていつて海に入つて死ぬ。それを日本語で歌をつくると、こんなにきれいになるのか。「大和撫子、紅に咲いきてにおえり」。騙されるわけですよ。日本語は、あやしい力をもっているなと思ひました。大人になつてからそう思つたんですけど。

考えてみると、戦時中に、戦況報告のニュースは文語体で発表された。普通のニュースは口語体な
んですよ。大本営陸軍報道部発表とかになると文語体になる。アツツ島に何万の敵が上陸して、日本
軍は全員戦死したというのを伝えるのに「日本軍は敢然と戦い、12時間の戦闘の末に全員玉砕せり」
と。文語調の簡潔な強いことばに縛られるわけ。心が呪縛されるような気がする。私たちはそうやっ
て心が呪縛されて軍国少女として育ったんだなということの後になつてから感じるんです。

文語体と戦争

そういうえばニュースの報道、戦況を報告する時、空襲の状況を報告する時、文語体だったなと思
いました。「敵機30機、編隊を組んで大阪上空に侵入せり。我が方の損害軽微なり」と。大阪がまっ黒
こげになつて半分くらい焼けてしまつても「我が方の損害軽微なり」という。だから自分のところが
空襲にあうまでは、空襲はたいしたものではないと思つていた。「損害軽微なり」ですから、ちよつ
とした損害を受けて一軒くらい家が焼けたのかなと思つていたんです。ところが、一つの町が全部焼
けてしまうような状態でも「我が方の損害軽微なり」。日本の損害はたいしたことはありませんと口
語でいわれるよりは、「我が方の損害軽微なり」という方が格調高くてギョッと力をもちますよね。
日本語は一体なんだろうかと。文語まじりの文章はなんだろうかということをお分たつてから考えた
ことがございます。

私の戦争体験を三つに絞つて申しあげました。そして後日談、戦争のフィルムを見たお話までして
しまいました。とりあえずこのくらいで絞つておきたいと思ひます。山本先生には個人体験と歴史学

の問題、宮澤先生には学校外の教育、「たて・よこ・ナナメの教育環境」を主張されますから、学校の外で受けた、私の場合は歌でしたけれども、外から受けた教育についてお話をいただければいいかなと思っております。とりあえず、ここで切らせていただきます。

小玉 ありがとうございます。引き続き宮澤康人先生、よろしく願います。

4. 宮澤 康人氏講演

東京大学 名誉教授

著書：『教育関係』の歴史人類学―タテ・ヨコ・ナナメの世代間文化の変容』（学文社、2011）

『大人と子供の関係史序説―教育学と歴史的方法』（柏書房、1998）他

宮澤です。どうぞよろしく。私は男の子だったためでしょうが、本田さんの話されたことに対応すること、対応しないことがあります。ナナメの関係についてしゃべるようにとふられたんですが、そういう風には考えてきませんでした。私は国民学校6年生、12歳の時、敗戦を迎えました。生まれ育った長野市は善光寺の門前町でして、これといった工場もなくて、空襲は今というJRの駅が一度爆撃されただけで戦争の直接の悲惨な体験のない、恵まれた戦時中の子になります。「戦争と子ども」

ということで自分の体験を生々しく語って何か印象を残すというわけにはいかないんですが、学校が師範学校附属、後に教育学部となりますけども、附属だったものですから、他の学校のように極端な天皇制、軍国主義の教育は受けませんでした。戦後になって同世代の友人たちと話して、各県の附属とか東京教育大附属などの小学校の生徒だった人たちも同じく例外的で、教育史学者がいうほど、戦争中の教育というのは軍国主義一点張りという雰囲気じゃなかったと思います。私は歴史と個人的体験の実感との板挟みになった気がしたことがあるんですけど。

強い兵隊になれるかどうか

それでも週に2、3回は往復ビンタの罰を受けました。ビンタに行きと帰りがあるんですね。こっちへ傾いた反動でまた逆から殴れるから、その衝撃たるや女の子なんか吹っ飛んじゃうわけです。ほとんど毎日、殴られるような子もいました。私なんか少ない方でしたが。慣れていきますと、往復ビンタはそれほど怖くなくなるもんだと覚えました。昭和一桁は思春期の栄養不足で早死にするなんて言われたけど、それほど早死にしなかったのは、往復ビンタで鍛えられたせいもあるのではないかと思うほどなんです。しかも連帯責任なんですね。班の誰かがヘマをやると、全員が同じように殴られるんです。その時は不条理だと思っただんですが、後から考えると平等・連帯ということでは、ある意味ではいい教育だったのではないかなと思うことさえありました。

他の学校の生徒から、附属はお坊ちゃん学校とみられていて、下校途中、一人で帰る、そういう時に運悪く、よその学校の生徒集団に出くわすと、帽子をとられたり、帽子が公立と違うんですね。こ

づかれたり、嫌がらせを受けることが、よくありました。そういうめにあうことの意味は、戦後になって大人になっていろいろ気づきました。嫌がらせをする側の気持ちも考えましたけど。それからお坊ちゃん学校の附属のクラスの中に、またさらにお坊ちゃんという扱いを受ける子がつくりだされるんです。体が弱かったり、気が優しく、運動神経が発達していない子が狙われる。ターゲットにされた子は「ボチ」と呼ばれる。ボチというのは坊ちゃんの蔑称です。その時、私もいじめる側に加担したわけですが、どうということばを投げつけたか。相当ひどいことをいったと思うんです。弱虫は軍人として役に立たない。「お前なんか死んじまえ」とはいわなかったけど、自分たち自身の意気地なさを否定するような感じで、弱いものを軽蔑する心情が育てられた、培われたと思うんです。学校でも学校の外でもあったいじめの形ではありますが、いじめに加担したことが、ずっと胸につかえていたので、戦後だいたいぶたってから、小学校の同級会の時に、その子には頭を下げて謝りました。実は私自身も体があまり丈夫でなかったせいもあって、いじめにあったことがあります。強い兵隊になれるかどうか当時の学校内外の、大人というよりは子どもの中の価値基準だったように思います。

ナナメの関係

「戦争と子ども」というテーマについてはこれまでに調べたことがなくて、小玉さんからいわれて慌てて本を読んでみて、改めて、重苦しい、重要だけれども、やりにくいテーマだなと感じました。ナナメの関係に多少は関連すると思いますが、私には叔父や叔母がたくさんいました。全部で16人。父方、母方をあわせて。その一人、父方の若い叔母から「一族には軍人が一人もいない。それは大変

残念だ。お前はどうか。だけど体が弱いからな」と蔑むようにいわれて、その頃、小学校2、3年頃、ひどく傷ついた覚えがあります。それで発奮しまして、器械体操をがんばったり、水泳に励んだりして、将来は海軍兵学校、当時は海兵と呼んでいましたが、それをめざすような見事な軍国少年になります。山国育ちだったために海への憧れが加わったかと思いますが。友だちの兄さんで海兵の生徒だった人が学校に訪ねてきたことがあります。真っ白に輝く海兵の制服がギリシャ神話に出てくるアポロンのようにまぶしかった。羨ましかったことを思い出します。これは男の子特有の感想だと思いますが、そういう兄さんのいる友だちが、ひどく羨ましくて友だちに嫉妬したということも思いだします。

これもナナメの関係にはなるかと思いますが、当時、加藤隼航空隊隊長の戦死ということがありまして、加藤隊長は「あとに続くを信ず」という遺言を残して死んだらしいですね。大変な衝撃を国民に与えたようです。私も感動して海軍の飛行兵になって、ゆくゆくは敵の戦艦に突っこみたいという気にさせられました。その頃、私は天皇陛下のために死ぬとか、お国のために死ぬという実感はありませんでした。ただ特攻隊になって敵艦に突っこむのはどういふことなのかと思ひまして、おりにふれてそのシミュレーションをしました。頭の中で思い描いたり、自転車に乗ってスピードをだして走っている時にも、このまま敵艦に突っこんでいったならばどんな感じかなと。ちょうど、サン・テグジュペリが飛行機でドンドン空にのぼって、そのうちにパーツと消えていくというのに似た、自分のからだがより大きなものに吸収されることを想像しました。一種の死ぬことへの恐れに対しての無意識な反応だったのかもしれませんが、そういうことに憧れて特攻隊の突っこむ行為に、怖いという

感じとともに崇高なものにとけこんで高揚するという不思議な感覚を、なんだか感じたことがあったようです。

権威を貶める

それとは逆のことですが、一方で戦時中の子どもは権威を貶めることに熱中したところがあります。本田さんが歌の歌詞をあんなに覚えているのでびっくりしたんですけど、私は戦争中のことを忘れてくくて、意識的にか無意識的にか、忘れたこともありませんが、替え歌も子どもの中でありました。いくつか覚えてあるものもあります。「見よ、東海の空明けて」という『愛国行進曲（森川幸雄作詞、瀬戸口藤吉作曲、1937年）』がありますが、それなんか子どもたちは早速、「見よ、父ちゃんの禿げ頭」と言い換えて喜んでいたり、そんなのは罪のない方なんです、一番は勅語のパロディですね。勅語は神聖にして怖いものなんです、天皇のことばで儀式のたびごとに校長先生が恭しく読み上げる、天皇は自分のことを朕と呼ぶんです。僕とか私とか、おれとはいわないんですね。「朕」は天皇の一人称なのか、文法的には面白い意味づけがあるようですが。勅語は「朕惟フニ」で始まるんです。校長先生が恭しく「朕惟フニ、我カ皇祖皇宗」、その間子どもたちはじっと下を向いて鼻をすすつちやいけないんですね。鼻をすすつたことがわかると、後でビンタを食らうので皆、我慢しています。「御名御璽」で終わると皆、一斉にズズズツとやる。講堂中が鼻水をすする音だらけになる。今、ご紹介するのは大変下品なのですが、「朕惟フニ、屁をひった。汝臣民臭かろう」。これは大変人気があつて、緊張している時に誰かが役どころを心得たものが出て、タイミングよく発言すると盛り上が

ったことがあるんです。子どもたちは喜んで囃し立てる。中にはここで口にするのははばかれるようなものも、もっとあるんですけど。それは控えることにしまして。こういうことを先生に聞かれても大変なんです。当時は憲兵隊に見つかったら、子どもでも容赦なく引っ張られる。怖がられています。ただそのスリルがあつたために、危険な冗談をいうことも子どもたちはあつたんですね。そのへんは分析の仕方、解釈の仕方があると思いますが。

憲兵隊は当時の怖い大人の象徴でもあつた。目上の者に反抗することはタブーでした。目上の者に口答えをするなどは思いもしないんですね。身体化されたというか、規律訓練で、へんなことを、ふざけた、茶化すようなことをしながら、他方では抑圧されていたという二重人格を、子どもながらに生きていた。大人全体の権威の強さというものがあつて、その中で初めて力関係が、個々の親子、先生、生徒の「たて」の関係に働きかけて機能する。それがあつてこそまた「よこ」の関係も機能する。「ナナメ」の関係は、依田明さんがきょうだい関係の年上、年下のことをいっていますが、私は世代を同じくするものは「よこ」の関係であつて「たて」の関係は父と子、「ナナメ」の関係は叔父とか叔母というか、叔父と甥、叔母と姪、近所のおじさん、おばさんも「ナナメ」の大人です。学校の先生も親との関係の「たて」をはちがう、ナナメの関係と私は考えるんですけども。親世代の中で一番怖い大人の象徴が憲兵隊だつた。憲兵隊は背筋が縮むくらい怖がられていた存在でした。

両面あつたんですね。無意識の反抗心が普通の子どもにもあつた。別の例にもなりますが、「お氣」ということばがありました。今は死語になつているのでしようかね。「先生のお氣に入り」の蔑称で、後で皆にいじめられる。いじめられたことを先生や親に告げ口することはない。親にも先生にも。大

人への告げ口は子どもたちが一番軽蔑したことであった、戦争中に限らないと思うんですが、子ども世界に、ある一種の横の連帯感が自然に働いていたような気がします。私がまだ話すべきこととしては、「ナナメ」の関係の補足とか、喜安さんの話も私と2年違うだけなのに、ちよつと違うな。それは同じ男の子の中でも戦中、2、3歳の違いで、また住んでいたところの違い、周りの環境でも相当、違うのかなといういろいろありますが、とりあえずは、ここで話を移したいと思います。

小玉 ありがとうございます。それでは次に山本秀行先生にお願いいたします。

5. 山本 秀行氏講演

こども教育宝仙大学 学長

著書…『ナチズムの時代』（山川出版社、1998）

『ナチズムの記憶―日常生活からみた第三帝国』（山川出版社、1995）他

山本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本田先生、宮澤先生が戦争体験からお話を始めておられるので、ぼくもそれにならうことにいたします。ぼくが生まれたのは、1945年7月27日です。戦争が終わる一八日前なので、ぎりぎりのところで戦中生まれということになります。胸を張って戦後派だといえないのが、つらいところです。しかし当然のことながら、戦争のことは覚えて

おりません。この教室におられる戦後生まれのみなさんとおなじです。そんなほくが、本田先生や宮澤先生といっしょに戦争体験を語るということには、みなさんもちよつと変だとお思ひになるかもしれません。本人も困っております。

そこで、ほくの場合には戦争体験というよりも、戦争についてのイメージや記憶といいかえて、ほくの戦争の記憶がどのようなもので、どのようにつくられたかをまずお話することにいたします。それは、さきほど本田先生が、戦場の戦闘そのものよりは、ニュースを伝えるアナウンサーの文語体や、悲しげな軍歌が、戦争のイメージを形成しているとお話になりましたこととつながってくるかと思ひます。直接目撃した戦闘シーンではなく、いろんなところから入ってくる情報、表象も、じつは戦争体験の核になっているということだと思います。そうすると、戦争体験は戦争中でなくとも、戦争が終わった戦後にもあることになり、戦争を直接には知らない人たちも戦争を体験しているということになります。それをお話するのが、戦争が終わるぎりぎりのところで生まれたほくに与えられた役割ではないかと思う次第です。

それともうひとつ、世代という点からも考えてみたいと思います。さきほど宮澤先生が、喜安さんと2つ、3つしか違わないのに、相当に違うなとおっしゃいました。ほくも戦中派にくくられると、自分ではもつと若いつもりなんだけどと、すこし違和感を感じてしまいます。それぞれ違いを感じながらも、社会的には非戦後派世代と括られ、今日ここで三人いっしょに、戦争と子どもについて語ることになったわけです。違うけれど、共通のものと括られる。それが世代というもので、これは出生年をもとにしたグループ化で、「団塊の世代」とか、「共通一次世代」とか、「バブル世代」、「ゆとり

世代」などと、時代状況と個人の嗜好や性癖を結びつける便利なタームとして用いられています。みんな自分は違うと思いつつも、他人にはあてはめて使っています。それぞれ違いはあるのですが、他の世代との違いを強調することで、おなじ世代内の共通性を意識させ、生みだす言葉が世代です。ここでは、いちおう1930年から45年生まれの人びとを、本田先生からほくまでをひとつの世代として括ってみることにいたします。戦争の影のもとで幼少期をすごした世代として、「戦争児童世代」と呼ぶことにいたします。

それではまずほくの戦争体験、戦争の記憶からお話いたします。

戦争の影

戦争が終わったあとでも、戦争は身近にあり、ある意味で戦争は続いていました。ほくの親戚にも戦死した叔父がいて、なにかの寄り合いのさいには、まず軍服姿の遺影にお線香をあげることからはじまったものです。街に出ると、白い無地の衣装を着た手や足のない傷痍軍人が喜捨を求める姿をよくみかけました。今から思えば、ほくの戦争の記憶は、みじめさや無念さ、なによりも敗北と結びついているようです。戦時体制を知らないのです、よくいわれる解放感とはあまり結びついていません。ただ、敗北感とオープンな開放感とが奇妙に結びついていたのがアメリカ進駐軍についての記憶です。朝鮮戦争がはじまると、町のメインストリートをアメリカ軍のジープやトラック、衛生車、炊事車の車列がよく通りました。戦車がくると、家ががたがた揺れ、夏にはアスファルトがめくりあがります。家の近くに四つ角があるので、戦車はなかなか曲がれないので、車列は停まり、長い列がでままし

た。ほくたち子どもはそこに群がると、アメリカ兵は気さくにチューインガムを投げてくれました。ほくも欲しかったのですが、どうしてもその列には加われなかった。ちよつと恥ずかしくて、後ろめたい思いがしたからです。これがほくの戦争体験ですが、敗戦とアメリカ軍とが奇妙に結びついています。

さきほど、小玉先生は、子どもたちは歴史の中で必ずしも主人公ではなかった、歴史の中の子どもたちについてどういった視点から議論できるのだろうかと問題を提起されました。そこで次に、『戦場の小さな天使たち』という映画を糸口にして、いくつか考えてみたいと思います。

『戦場の小さな天使たち』

この映画は、ほくの大好きな映画で、第二次世界大戦中、ドイツ軍の空襲に毎日さらされているイギリスが舞台になっています。ロンドン郊外に住むビル少年一家の日常生活が生き生きと描かれています。原題は『Hope and Glory』と云々、エルガー作曲のイギリスを讃える歌、「希望と栄光の国」からとったものと思われませんが、ちよつとシニカルな響きを感じます。監督は、宮澤先生と同じ年で、1933年生まれジョン・ブアマンという人で、みずからの体験をもとに制作したといわれています。1987年の作品で、日本では1988年に公開されています。ごらんになった方もおられるかと思いますが、たいへんおもしろい映画で、2006年の微音祭に参加した学生たちが後夜祭をしたいというので、ちよつと今日とおなじこの大教室でこの映画を上映しました。

主人公は、当時のブアマン監督と同年齢のビル少年で、8歳から10歳くらいにあたります。ビル少年の家は焼かれてしまい、郊外のお祖父さんの家に疎開することになります。当然、観客はドイツ軍

の爆撃によって焼きだされたと思うところですが、じつは失火で焼けてしまい、疎開することになったのです。戦争だから、きつと空襲にあったに違いないという予想を裏切る皮肉な視線が、随所にくるがこの映画の大きな魅力です。もちろん空襲でロンドンには大きな被害にあいます。ビル少年たちの学校も爆撃をうけました。地下室に隠れていた生徒たちは、ワーツと蜘蛛の子を散らすように校庭に出てくると、皆一斉に手にもつていた教科書やカバンを放り投げて、喜びます。学校を破壊したドイツへの怒りよりも、学校や授業から解放される喜びに、小躍りしながら、「よくやった。ヒトラー万歳。ヒトラーありがとう」と叫びながら、校門から走り出て行くシーンが、とても印象的です。ほくはこのシーンを観るたびに、共感のあまり涙がでそうになつてしまいます。いやな試験や授業があると、台風や地震がきて学校が休みになればいいのにと思つたことは一度や二度ではないからです。これは子どもの視線です。大人だったら、ドイツやヒトラーを憎むでしょう。おなじ戦争でも、大人の視線と子どもの視線とは違つた世界がみえてきます。

小玉先生が用意された本日の趣旨書のなかでは、ドイツの版画家で彫刻家のケーテ・コルヴィッツ (Käthe Kollwitz, geb. Schmidt, 1867-1945) が描いた「ドイツの子どもたちは飢えている」がとりあげられていました。「そこに描かれているのは、とても子どもらしい瞳を持った子どもたちですが、私たちのなじみのある子どものイメージからかけ離れた子どものような気がします」とコメントされています。たしかに見上げる子どもたちの瞳はたいへん印象的です。しかし、これは誰の視線で描かれているのでしょうか。子どもたちの視線でしょうか。それとも、第一次世界大戦で子どもたちをなくしてしまつた母親が、その思いをこめた視線で描いたものでしょうか。『戦場の小さな天使た

ち。』は、もちろん監督の視線で描かれているのですが、監督は少年のころの視線で戦争をとらえているのです。コルヴィッツは母親の視線から戦争をとらえていると思います。子どもを主人公としてとらえることは、本田先生がいわれるように、「異文化としての子ども」として、つまり子どもを違うものとしてとりあえず見ることによって、子どもをとらえ直すことができるのではないか。そういうことを『異文化としての子ども（本田和子著、筑摩書房、1992年・初版1982年）』の中で書かれていたように思います。戦争と子どもを考える場合、あえていえば、子どもをまず母親の視点から解放することが必要なのではないのでしょうか。これがひとつの論点です。

『戦場の小さな天使たち。』は、もちろんフィクションです。ブアマン監督が自分の体験をもとに描いたフィクションです。体験は、個人的で、曖昧なもので、あとで手をくわえられたり、都合の悪いところが省略されたり、再構築されたりする可能性に満ちています。この映画にもきつとそういうところがあると思います。しかし、そういうものを通して、いったい何がみえるのか。「体験を語ることにどういう意味があるのか。個人の体験を語ることは歴史をつむぐこととどう関係するのか」と、さきほど、本田先生から難しい宿題を背負わされてしまいました。この問題を、この映画にそくして少し考えてみたいと思います。

歴史の見方を広げる

さきほどの学校が空襲にあうエピソードについて、それが本当にあったことなのかどうか。またこの映画に描かれていることが、当時のイギリスの日常生活を忠実に再現しているかどうか。そこに重

点をおいて調べるやり方もあるかと思えます。事実の確定は歴史学の基本的な任務です。しかし客観的な史料ならいいのですが、記憶や主観的な証言となると、真偽や正確かどうかを確定することはそう簡単ではありません。困難であるとさえいえます。そのためこれまで歴史学では、そうした主観的なエゴ・ドキュメントよりは、公文書などを根本史料としてきました。その結果、歴史の守備範囲は狭まり、手堅い研究はできるのですが、ともすれば想像力にかけものになりがちだったわけです。しかし1970年代ごろから、社会史とか、人類学と提携した歴史学、下からの社会史などの動きがおこり、人びとの日常生活がテーマ化されるようになりました。人びともたんに支配されるだけの受け身の存在ではなくなり、なによりも行為の主体としてとらえなおされるようになりました。当然、記憶や体験など主観的なものを取り組まざるをえなくなつたのです。

ほくの場合にはこう考えました。証言や体験を真か偽かと問うのではなく、その証言を歴史の見方を広げていく手がかりとして用いるということです。記憶や証言のもつあいまいさやバイアスも、マイナスではなく、二項対立的な図式を批判し、歴史の重層性や多元性に目を開き、これまでは見えなかつたものを、可視化する手がかりになるかもしれませぬ。歴史研究では、「問い」を発見することがなによりも重要なことです。いかに新たな切り口をみつめて、これまでの常識を崩していくかが歴史研究の生命でもあります。たとえ主観的であいまいなものでも、歴史のあらたな見方を開き、広げていく手がかりとして十分利用できるのではないか。これがほくの考えていることです。いかがでしょう。これが第二の論点です。

戦争と世代

この映画からでてくる第三の論点は、まえにも述べました「戦争児童世代」という括り方です。ブアマン監督と宮澤先生は同い年で、おなじ戦争児童世代に属しています。この映画はイギリスの戦争児童世代の戦争体験とその表出といいかえることができます。すると日本の戦争体験とそのあり方とイギリスのそれらとを比べてみたらどうだろうか、という新たな切り口も浮上してきます。

「戦争児童世代」は、現在では、一番上の1930年生まれが84歳、一番下の1945年生まれで、69歳くらいになります。この世代も老境にさしかかり、自分の一生を振り返り、締めくくりをつけようとか、とらえかえそうとする動きがしばらく前からみられます。たとえばドイツでは毎年、この世代による回想録や自伝小説が1000冊も出版されているといわれます。かなりの数です。ドイツで戦争児童時代の自分史という形で自己表出活動が盛んになっているのには、いくつかの理由があります。ひとつにはこの世代が、一生のあいだに、戦争、東西への分裂、そして再統一という時代の激動、変動を何回も経験していることがあります。時代や二つの国家に分断されたドイツで、自分たちのアイデンティティを再確認したいという欲求も強いでしょう。またナチズムの過去を背負うドイツでは、これまでは戦争について語りづらいつらいつらという事情がありました。しかし、戦争のときに子どもであったことは、そうした負い目を軽減し、苦難の歴史、被害者の歴史として戦争を語ることを可能にするものです。さらに戦争児童世代という括り方、特徴づけを自分に適用することで、自己表出にはずみがついたのではないかと想像しています。

ドイツほどではありませんが、日本でも自分史がブームとなっています。さきほどからお名前がで

ている喜安朗さんは、戦争児童世代のはしりといえますが、歴史家として、自分の少年時代を俎の上にあげて、自己解剖を試みています。それが、『天皇の影をめぐるある少年の物語―戦中戦後私史―』（刀水書房 2003年）という回想録です。喜安さんは、当時たいへんな進学校だった本郷の誠之小学校の優等生で、中学受験にしのぎを削る日常生活が活写されていて、たいへん興味深いものです。喜安さんは、東京高等師範学校附属中学校に進学しますが、これは現在の筑波大附属で、お茶大の南門のすぐ前にある学校です。喜安さんによると、本郷の西片から毎日徒歩で通う少年には、女高師のお姉様方はいへんまぶしく思えたそうです。さきほど、本田先生が男の子と女の子の身体性の違いなのかしらと、問題を提起されましたが、世代という括り方だけでは、ジェンダーという視点が盲点となることがわかりました。

戦争児童の研究

このところドイツでは、回想録だけではなく、戦争児童世代についての研究が相次いで出版されています。たとえば、ルー・ゼーガースの『父さんは戦争にいったまわ』(Lu Seegers, *Vati blieb im Krieg: Vaterlosigkeit als generationelle Erfahrung im 20. Jahrhundert. Deutschland und Polen*, Göttingen: Wallstein, 2013.) やインツァン・メッケルの『経験の断絶と世代の自己主張』(Benjamin Möckel, *Erfahrungsbruch und Generationsbehauptung: die "Kriegsjugendgeneration" in den beiden deutschen Nachkriegsgesellschaften*, Göttingen: Wallstein, 2014.) など、これらは世代論を踏まえた研究になっています。また、戦争児童世代の日独比較という点では、松永優子さんが聞き取り調査

をもとに「ドイツと比べた日本における戦争児童であったことの受け止め方」という学位論文を2012年にドイツ語で書かれていることがわかりました。これは、ミュンヘン大学医学部のエアマン教授の「第二次世界大戦中に幼少期を過ごした世代の心的外傷後ストレス障害PTSD」プロジェクトに、神戸大震災を経験した兵庫トラウマストレス研究所が協力を申し出たことが発端となっているようです。この論文がインターネットで読めるので、たいへん便利ですが、ネット社会は確実に寝不足という時代の病をかかえこむことになります。

ゼーガースの研究によると、ドイツでは、第一次世界大戦で、兵士が約240万人戦死し、寡婦は60万人、片親の子が96万8000人、孤児は6万5000人でした。それが第二次世界大戦では、471万人のドイツ兵が戦死し、寡婦は170万人。片親の子は250万人、孤児は10万人にふくれあがります。ヨーロッパ全体では第二次世界大戦による片親の児童と孤児をあわせて1300万人にのぼるとされています。日本と比べて父親不在の割合が高いのがドイツの特徴です。

松永さんの研究では、戦後まもない時期の西ドイツにおける戦争児童の調査結果が紹介されています。ひとつは、小学校に入学したばかりの1937、38年生まれの児童について調べたものです。この調査によると、この世代の学童は、驚くほど身体的に健康で、精神的能力も社会的能力も備えていることが判明したそうです。またその後の別の研究でも、ソ連やポーランドから帰還した避難民の子弟も、驚くほど健康で、学業成績もドイツ生まれの児童と変わりがなく、向上心が高く、環境への適応力が顕著であると指摘されています。調査の詳細についてはわかりませんが、それにしても空襲や疎開、戦後の食料難にさらされた世代、家族が離散し、家庭での教育も満足ではなかったと思われる

世代にしては、予想とは正反対の調査結果で意外に思われる方も多いのではないのでしょうか。だから面白いといえます。

震災と子ども

ぼくは今、こども教育宝仙大学という保育者養成の大学に勤めています。小さな保育者養成大学ですが、2011年の東日本大震災で大きな被害にあった南三陸の復興を支援する私大ネット36の幹事校をつとめています。つい先日、今年のサマープログラムを総括するシンポジウムが國學院大学で開催されましたが、そこで興味深い報告を聞きました。親を亡くした子どもたちの面倒をみている現地の先生方の話ですが、子どもたちは、周囲の大人たちが落ち込んでいるのをみて、「自分たちが強くないらなければいけない」、「グッと強くあろう」、「強くないといけない」、「自分がこうでなきゃだめだ」という気持ちになっているそうです。先生方は「子どもたちの強さ」を感じたと語っていました。健気さといってもいいと思います。この報告を聞いていて、震災にあった子どもたちと、さきほど松永さんの研究から引用したドイツの避難民の子どもたちは、どこか共通するところがあるような気がいたしました。ぼくたちは子どもを戦争や大震災の被害者、犠牲者として考えがちです。たしかにドイツでも、第二次世界大戦中、連合国の空襲によっておよそ7万4000人の子どもが死亡したといわれています。子どもたちが被害者であることはまちがいないことなのですが、南三陸の子どもたちや、ドイツの避難民の子どもたちの事例は、それだけではとらえられない別の姿もあることをも示しているように思えます。子どもたちの視線でとらえなおすことは、歴史の見方をおし広げ、見えないもの

をみえるようにしてくれることになるのではないのでしょうか。だいぶ長くなってしまいましたので、これで締めくくりにいたします。

小玉 たくさんの課題を私もいただいたように思います。ありがとうございます。

6. リプライと討論

小玉 それではここから三人の先生方のお話をうけて、相互にリプライをお願いしたいと思います。まず、本田先生からお願いします。

戦争と体験

本田 いろんなことをお二人から伺って、私なりに、整理はできないんですけど、面白いなということはいくつかございました。山本先生が「体験」についておっしゃった「真か疑かが問題ではない」と。今日のテーマに絡めますと、戦争中に子どもが受けた体験、教育、その中に、もし不幸だったという点を探すとすれば「教えられることは真である」という教育を受けて、従う体ができていますから、真であると飲み込んだ、そこが、もしかしたら戦争中の子どもが受けた、軍隊式の教育を受けて辛かったとか、大変だということもありますが、そうではなく、一番に問題になるのは「これは真で

ある」といわれることを受け入れる体制が、こちらの側にできてしまった、それをつくることに意を注がれた教育であった。そこが問題だったのかもしれない。戦争が終わってから、人のいうことを全部疑うという体制ができあがりましたから、逆によかったのかなと思ったりもいたします。

替え歌

替え歌のことは大変面白いと思ひまして、替え歌は確かに男の子たちが歌いました。私たちも男の子が歌っているのを聞いて覚えて、家に帰って小さい声で歌って母に叱られたり。男の子がつくるのではなく、どこからか聞こえてくるのを声を出して歌った。替え歌で面白い例がありました。戦争末期に特攻隊の人たちが肩を組んで「貴様と俺とは同期の桜」というのがあります。「同じ航空隊の庭に咲く、咲いた花なら散るのは覚悟、見事散りましょう、国のため」、それは実は、太平洋戦争が始まる前の『少女倶楽部（講談社、1923—1962）』昭和13年1月号に載った少女向けの歌だったんです。「君と僕とは二輪の桜」という歌だった。「君と僕とは二輪の桜、同じ舞台の枝に咲く。血肉わけたる仲ではないが、なぜか気があうて別れられぬ」。なぜか少女向けの軍歌として『少女倶楽部』に載ったんです。西条八十がつくっていたと思います。

ところが少女たちは誰も歌わなかったらしいんですね。それがどうなったのか、回り回って替え歌で男の人たちが「貴様と俺とは同期の桜」と変えたんですね。戦争末期に召集がきて若者が戦争にく。壮行会をする。会場で必ず出てくる歌がこの歌だった。肩を組んで興奮してみんなで歌ったのが、少女向けの歌だった。講談社がなぜそういうのをつくったのかわかりませんが、探っていくと当時の

人たちの少女文化に対する思いをどんどん変えていってしまった若者たちの思いが錯綜して面白いと思ったりしました。

替え歌は女の子が自分でつくることは、あまりしなかったと思いますが、男の子はたくさん替え歌をつくりました。今でも覚えています。一番へんなのは「蒋介石のおなら」。「しょっ、しょっ、しょっ、しょっ、しょっ、しょっ（証城寺）」の歌にあわせて歌うわけです。「しょっ、しょっ、しょっ、しょっ、しょっ、しょっ、せ、せ、世界で一番臭い」とかいうんですね。「海行かば」という歌がございます。「海行かば水漬く屍 山行かば草むす屍 大君の辺（へ）にこそ死なめ かえりみはせじ」。あれが何のことかわからなかったんです。「大君の辺にこそ死なめ」て何かと思つて兄に聞きました。兄がニヤニヤ笑つて「辺とこののはわかるか?」「おならでしょう?」「そうだよ」「天皇陛下がおならをするつてどういうこと?」と聞きましたら「天皇陛下のおならを嗅いで死んでも後悔はしない、それくらい天皇陛下は偉い人なんだ」と。兄はしょっちゅうからかう人だったんですけど、からかわれているのかどうか、よくわからなくて「そうかな、昔の防人たちは忠義だったから天皇がおならで死んで後悔しない歌かな」と思つて、大きくなって、とんでもないことに気がつきましたけど。子どもつてのは他愛ないところもありまして、戦争の苛烈な体験を他愛なく受け止めているところもあるのではないか。私なんか、多分に他愛ない受け止め方をしておりました。

戦災孤児

私が「戦争と子ども」という、かなり深刻な体験をしたのは戦争が終わってからです。疎開先から

東京に帰ってくる時、九州に疎開しておりましたので、汽車が京都で止まってしまいました。長い長い旅を続けて。石炭がなくなつて止まった。「明日、動くかわかりませんから、夜をあかす準備をしてください」と。京都の駅において、そのへんに座つたり、ベンチで夜明かしをする準備をした。幸いベンチに座ることができまして、5人で。農家の方たちがつくつてくださったおむすびがあつて「ここで夕飯を食べましょう」と母がきょうだいに配つたんです。そしてふつと見ますと周りを黒山のような人だかりなんです。みな、痩せこけてボロを着て垢だらけの子どもたちがワーツと取り巻いているわけです。戦災孤児ですね。それを見てはじめて「ああ、日本は戦争に負けたんだ」と思いました。

私たちは母が一生懸命に庇護してくれましたから、あまり困らない戦争体験をしていたんです。学校にはいきませんでしたけど、勉強はしなかつたけど、その他の点では、まあまあという戦争体験をしているんです。ところがそれを見てはじめて、子どもが戦争に遭遇して誰も保護者がいないというのはこういうことかと思つて、これは大変だと思ひました。それがきっかけで児童学科に入ったわけでは全然、ないんですが、子どものことをチラツと考えたのはその時でした。

孤児たちからの聞き取り

もう一つ、数年前にオーストラリアのクイーンズランド大学にまいりました。院生の方が「日本に留学したい」としきりにおっしゃる。「日本に留学して何をなさるの?」「戦災孤児がどうやって大人になつたか、一人ひとりに即して丁寧聞きとり調査をしてそれを知りたい。日本にそういうデー

があれは教えてほしい」。私はちよつとギクツとしまして「もしかしたら日本人はやってないかもしれない。だけど、もしなかったらオーストラリア人に先を越されるのは恥ずかしい気がするけど、やってごらんなさい。あなたの日本語ではだめだから日本人と組んでおやりになるといいわ」といって、帰って文部科学省にいつて調べましたら、大雑把な数字とか、何人の戦災孤児がいて施設に何人入ったかという記録はあるが、一人ひとりに即して、どこでどうやって大人になったかという聞きとりの丁寧な記録はないと。厚生労働省にいつても、ないと。急に日本人としてとても恥ずかしいことをしているように思つて、私がやろうと思つたんですけど、まだ一人か二人しかやれていません。早くやらないと、亡くなつてしまふんですね、戦災孤児たちが。皆さんの中に興味をおもちの方がいらして、ここでちよつとメッセージを出しておきますけど、身近で戦災孤児で大人になつた方がいらして、聞きとり調査をしてくださるとか、ここにこういう人がいますよと教えてくだされば大変ありがたいと思います。

私は自叙伝を書く気持は毛頭ないのですが、人の自叙伝は好きですから、丁寧な聞きとりをしてみたいと思います。最も丁寧な聞きとりには向いていない人間で、自分でしゃべつてしまふ人間ですから。歳をとりましたら、そういうことを一度くらいやつてもいいかなと。日本人として同じ世代の間としてやつてもいいかなと、チャツツと思つています。

お二人の先生のお話を聞いて、私も考えるところがたくさんあつたし、お茶大生らしい言い方をすれば、とても勉強になりました。ありがとうございました。

小玉 ありがとうございます。それでは引き続き、宮澤先生、山本先生からコメントをいただいたうえで、フロアからのご質問に応えて行きたいと思います。

体験の曖昧さ

宮澤 簡単に、二つだけ付け加えます。一つは「戦争児童世代」が心身ともに健全だということが不思議で、理由が思いあたらない。向上心が強いとか。これは重要なテーマだと思いました。

もう一つは体験というのは曖昧だと。映画のシーンで学校が爆破されて喜んだという話とは違いますが、山中恒さんの『子どもたちの太平洋戦争（岩波書店、1986年）』を読んで、体験自体が違いますし、それについての解釈が違うことを感じました。山中さんは大阪市の国民学校で私より2つ年上ですから、そのへんの違いかもしれないですが。私が一番びっくりした証言は、学童疎開後の話。苦しいから家に帰りたいと思っただけですが、学童疎開は昭和20年2月21日～3月10日までの間でした。「終了」となって、帰りたい者は帰っていいと。それにあわせて帰った子どもたちがいたんですが、東京の下町に帰った子どもたちは丁度3月10日の東京大空襲にあわせて帰るかたちになったので、帰った途端に焼け死ぬか、戦災孤児になる。そういう不幸な目にあつた。それに対してある教師の体験ですが、「ある学寮の教師はその空襲で死亡した者の名をあげたら、寮生の間からワツと歓声が上がり」と。喜びの声なんですよ。「口々にいい気味だ」というのを聞いて慄然とした。本来なら同じ学寮で半年以上いっしょに暮らしたのであるから、それを悼むことばが出ると思っただけである。それは全く逆だった」と。衝撃を受けました。戦争中にはいろんなことがあり、何でもありますが、子どもは残

酷なところがあるから、そういうことがあったのかなと。これはちよつと証言を確かめたいと思いましたが。典拠は、よくわからないのですが。このことが山中さんの本を読んで衝撃を受けたことでしたので、一言お話をしました。

山本 僕はわかるような気がするんです。狭いところでいっしょに暮らしていると、どうしても人間ってグループをつくる。靴下を履いている子、履いてない子、禿げのある子、ない子とか、つまんないことで差異をみつけることでグループをつくることによって、まとまって敵をつくろうと。疎開児童内部でグループや対立があつて、一つのグループが東京出身者で、いつもきれいなものを着て、いばりくさつて、頭がいいふりと思つていたかもしれないね。疎開のありよう、疎開先での日常生活まで立ち入っていけば、見えてくるような気がします。先生方は「御真影」って見ました？ どうでした？

御真影

本田 奉安殿というのが学校にごさいますして校庭の一隅に別の建物があつて、そこに御真影が入れてある。天皇皇后のお写真ですが。恭しく扉を開いて式典の時に校長が白手袋で恭しくもつてきて講堂の正面の祭壇に飾つて最敬礼をして、教育勅語の奉読があつて、セレモニーが始まるのが普通だったと思います。

宮澤　そうです。学校にも戦後に入った中学校でも鉄筋コンクリートの社ふうの建物がありました、登下校の前に最敬礼をすることは戦争中はもちろん、戦後も習慣になつていて、すつと通りぬけられなくて、立ち止まって頭を下げる習慣があつたんですが、それが喜安さんの本じゃないけど、いつのまにかなくなつていました。急に壊すところを子どもたちに見せるのは、いかにも天皇制を害するとか差し障りがあるので、2、3年のうちに秘かに壊したようです。

山本　儀式の時に写真を安置して恭しく大人たちがもつてくる。そういうのを見ていらつしゃったわけですね。どうでした？

本田　私はあまり感じなかつたんです。「天皇陛下ザアーツ」だと思つていたんです。1年生で入ったのが男子師範附属小学校だった。小学校の校長さんと師範の校長が同じ方なんです。講堂に重要な式典の時に皆が集まって前に附属の子どもたちが立つて、後ろに師範の生徒たちが立つている。お話の中で「天皇陛下」ということばが出てくると「ザアーツ」と音がするんですね。「天皇陛下ザアーツ」は一体のものだと思つていて、家に帰つて「天皇陛下というのはザアーツといふだけだよね」というと、兄が「ばかだなあ、あれは師範の生徒が皮のスリッパを履いて、休めの姿勢で話を聞いていて、天皇陛下ということばが出てきたら直立不動の姿勢にならないといけないから足をひきつける、床と皮のスリッパがこすれて音がするからだ」「天皇陛下とザアーツはひとつながりのものと思つていたの。だつてそういうふうに聞こえるんだもん。」兄がげらげら笑つたのを覚えているんですけどね。「天皇陛下

下」ということばを聞いただけで直立不動の姿勢をとらないといけないという決まりがあったようです。

「天皇陛下」との距離感

宮澤 条件反射のようになっていました。じろじろ見ちゃいけないですね。正面から見ないで頭を下げて何となく見る。おそれ多いという。特攻隊にアコがれたりしたけれども、「天皇陛下のために死ぬ」という結びつきは全然なかつたですね。山中さんも喜安さんも「天皇という人のために」という万葉集の人たちのような心情をもっていたように書いてあるけど、少なくとも私は自分が命を捧げる対象とは思わなくて。では何に對して命を捧げるのか、不思議なんですけどね。目的もなく、散ることが美学というか、玉碎ということばも、天皇のためじゃなくても、よかつたんです。「日の丸」の旗は掲げる時は祝祭日にうちからもちだして国旗をもつて行って家の前に飾る。国旗を見ると「戦争のために命を捧げないといけないんだな」という感情を抱いたことは覚えていますが。ご真影とか天皇陛下とかパーソナルな崇拜の念はもつた覚えがない。同年代の友だちでも茶化す対象みたいに天皇を思ったところがあつて、その点ではみんな非少国民でした。

山本 今から考えると、その方が当然かもしれませぬ。喜安さんの場合が特異な感じなのでしょうか。

本田 その小学校が特異だったのか、天皇が出てくるのが不思議だなと思つて。

山本　そこがもう少し詳しくあの本で語ってほしかったところです。ただ、喜安さんの場合、天皇と
いうものは、手が届かないもの、距離感があるものとしてとらえられています。喜安さんが通って
いた学校はエリート進学校で、生徒たちは小学校から家庭教師をつけたり、塾にいったりして、競争社
会、立身出世の社会に投げ込まれています。喜安さんによれば、自分の目標と重なるような、目指す
目標がないとやっていけない。しかも簡単に手が届く目標ではだめで、遠くにあるものが必要となる。
天皇はそうした競争社会、学歴社会では、手の届かない目標のようところがあつたのだと。推測で
すが。今度会つたら聞いてみます。「天皇のために」というところを。

本田　子ども時代にそういう意識がおありになつたのか、大人になつてから、あれは天皇に対する神
がかりだという解釈なのか、どっちなのかなど。

宮澤　喜安さんが出身の小学校にいつて資料をたくさんもつてきて、読みすぎたためにその読みの解
釈が自分の中に入ってきて、戦後の感覚から戦時中の資料を読んで、あたかもその感覚で生きてきた
ような錯覚にとらわれたのではないかなと、私は、そう思つたんですけど。

山本　今度会つたら聞いてみます。

（追記）その後、喜安さんに天皇について当時どう思つていたのかを聞いたところ、自分は天
皇のことを茶化すとか、斜めにみるとかはしなかつた。天皇については、あの本に書いたとお

りである。その理由として、誠之小学校はエリート校を受験するための学校で、自分はその優等生として学校の規範を率先して体現することを求められていたし、自分も努力した。担任の影響も大きかったし、制裁への恐怖心もあったとのことでした。）

本田 『靖国神社の歌（細瀧国造作詞、和真人作曲、1940年）』というのがありまして「日の本の光に映えて 尽忠の雄魂祀（まつ）る 宮柱 太く燦たりあ、大君のぬかづき給う 栄光の宮 靖国神社」という歌詞なんです。歌詞をつくった人は「あ、大君のぬかづき給う」とつくったんです。ところが途中から「天皇が英霊の前にぬかづくのは不敬にあたる」と「御拝したもう」に変えられたんです。どう違うのかなと思いつつながら「ぬかづくということばがいけないぐらいに天皇というのは特別な人なのかしら。へんな人」と思った。あとは「ザァーッ」で、それ以外に天皇のことは、あまり考えなかつたんですが。

女の子と戦争

宮澤 本田さんも私が思っていたように非少国少女みたいで、そのことを一般化できるのか、私自身もかねがね変かなと薄々思っていたんですが、本田さんの話を聞くと、それほどへんでもない。

本田 女の子って、そうだったような。母なんか、とてもへんな人で、軍人の妻ですから軍国の妻、軍国の母なんです。それでいながら私のために18歳の時にきれいな洋服もないとかわいそうだからと

シルクのスリッパなんか秘かにしまっておいてくれて「これコティの口紅よ」とか舶来品の口紅とか香水をしまっておいてくれたりするんですね。舶来品は敵だと騒いでいる時代に平気で。私も時々タンスをあけて「これ18歳になったらもらえるのかな」と。そんなところがある。

兄が「陸軍幼年学校にいきたい」といった時には反対しないで大賛成して、兄を特訓して、中学1年と2年と両方から受けられる。どうせ受けるなら1年で受かった方が秀才らしいから、4時に叩き起こして勉強させる人でいながら、幼年学校に入ったたら将校を養成する学校ですから、1年生で七五三のような小さい軍服を着て夏休みに帰ってきて「軍人になるんだから、陛下のご馬前で死ぬんだ」ということを兄がいったんです。そしたら母が涙を零して「幼年学校なんかやるんじゃないかと。子ども心にこの人、どうなっているんだろうと。女の人って、たくさんの面をもっていて、平気で整理しないで共存させて生きているんじゃないか。私も軍国少女で優等生で教育勅語もべらべら読める面と、家に帰ると香水を秘かに覗いている面と両面があって、平気で困らないで生きていたんじゃないかなと。男の子との違いが、もう一つわからないところはあります。

山本 男の子の場合も、そうだと思います。整理しきれない、どっちかに決めようとするけど、人間はいろんな世界を同時に生きているんだと思いますよね。

戦争のなかの日常

宮澤 戦争の最中は、記録映画とか映画を見ると四六時中、緊張しているような。私は大人もね、

365日四六時中、戦争ではなく、緊張するのは何かあった時だけ、1日のうちでも特別なことがあった時だけで、あとはずっとこけていたんじゃないかと。そうでないと、今でも中東などで内戦で殺し合っている中で、サッカーのワールドカップに出てくるし、練習もしている状況がわからない。総力戦というけど、戦争はその場が戦場になった時でさえも銃撃戦が行われていない時は一時の平和があって、普通の日常生活がある。日常性と非日常性がこんがらがっていて、非日常的な戦争の時間は限りなく少ないのではないかという印象をもつんです。

山本 第一次世界大戦を描いた映画『西部戦線異状なし』（原題：All Quiet on the Western Front）ルイス・マイルストーン監督、米国、1930年・日本公開1930年』を見ると、兵士たちが暇なんですよ。実際の戦闘が行われている時は短くて、後はみな歌でも歌ったり、昼寝したり、待機時間が長い。いかに退屈な時間を過ごすかがテーマになっています。ドイツの第二次世界大戦中の東部戦線は、パルチザンとかゲリラがきて大変なように思うんですが、当時の回想録を読むと、戦闘や銃撃戦はかなり稀で、ほとんどが歩哨に立って時間を過ごしています。

性による違い、民族による違い

宮澤 戦争体験の男と女の差、私も男と女で戦争に対するイメージや対応の仕方が違うのは、日本の特殊性なのか、日本の場合は男と女の役割が違うから、女を戦場につれていくのは日本男児の恥だというのがあったせいなのか、それとも世界どこの国でも男と女は違うのか。人類としての普遍性と日

本文化の特殊性、ヨーロッパ、アジアの特殊性なのか。ちゃんと資料に基づいて比較してみる比較文化が大事だと思えます。「戦争と子ども」「戦争と教育」はしょっちゅう採り上げられているテーマのようで、私には隔靴搔痒で、一部体験したものからみると核心に触れてない。いくら戦争の残酷な場面を描いたものでも、ギャング映画の方がもっとすさまじい暴力があったりして。戦争のリアリティをとらえている感じがしないということ、いつも思います。

山本 この世代が老齢に達してきたこともあって、今、研究がたくさん、聞きとり調査も出ています。先の大戦では、ドイツとポーランドがいつしよになってポーランドの子どもがドイツに強制労働に動員されたり、ポーランドでドイツ軍のために働かされたり、ドイツに連れさられてドイツ人として育てられたりしています。ヒムラーというナチの親衛隊の長官が、ゲルマン化政策、人種政策をやるんですが、その場合、彼は教育の力を高く評価している。ポーランドを占領すると、ここでは学校教育は解体していく、学校も閉鎖する。いずれ教育によってドイツに刃向かう民族が再興する、ドイツに刃向かわないようにするためにエリートを抹殺し、教育を抹殺する政策をとる。その一方で厳しい人種滅亡主義をやっていたヒムラーが、ポーランド人の中で優秀で向学心のあるものはポーランド人でも両親から切り離してドイツ人として育てる。そういう政策もやる。両親や現地から切り離し、教育の力によってポーランド人でもドイツ人になれるという。ゲルマン人の人種主義に基づいてポーランド人を抹殺しながら、彼らの優秀な子どもをドイツ人として教育の力で育てていく。ナチスは学校教育の力を信じていたのかなと。

本田 「教育の力」とおっしゃったのは、なるほどと思いますね。ポーランドの目の青い金髪の子どもをつれて行ってドイツ人として育てる。あの記録を読んで教育の力まで考えないで、北朝鮮と同じことをドイツ人もやったんだなど。人種政策であれだけユダヤ人を排斥しながら、片方でそういうことをやる。「教育の力」とおっしゃって、なるほどなと思っただけですけれど。あれは事実、そういうことが行われたということですね。

山本 ユダヤ人だけは拉致されてドイツ人として育てることはなかったですね。スラヴ人、ポーランド人の場合はあつたんですけれど。

宮澤 男と女の違いについてですが。第二次大戦中にアメリカでは女子は兵士として向いているか、向いてないかと真剣な議論になり、戦時中から女子も兵隊になる、将校になる道が開かれてたんですが、飛行兵、パイロットとして、女子は筋肉が劣るから肉弾戦になればかなわないが、機械操作は飛行機のパイロットには女の方が向いているという議論があつたり。逆に、女子は体調の波があるから兵士に向いてないという議論をしているんですけど、戦後になって男も女も男女平等からいえば女は兵隊になる権利がある。権利を奪われているのはおかしいという妙な議論があつて。今でもアメリカでは女子の将校も珍しくない。世界的にどうなのか。ドイツは女子の兵士が多かつたようですが。

山本 通信とか兵站、後方勤務はしますが、女性の戦闘員はいなかったように思います。相手方のポーランドとかロシアのゲリラ、非正規軍、占領軍への抵抗運動の中で武器をとった女性はいっぱいいます。ゲリラにはかなり有名な女性もいます。

選民思想

本田 ジェンダーの問題も絡んでくるような気がして。それを問題にしないで進めるのかなという気がしていたんですが。ユダヤ人がドイツで迫害されているらしいと伝わっていて、その時、日本はドイツに対してシンパシーをもっていましたから、先生が説明をなさった。「ユダヤ人は選民思想である。ヤハヴェの神が唯一絶対の神であって、その神にユダヤ人だけが選ばれている。そういう思想をもっているから他の民族とうまくいかないんだ」という説明だったんです。その時、私、ふと思ったのは「だって日本人だって天照大神の子孫だと教えられている、日本人の選民思想はユダヤ人の選民思想と、どこが違うんだろう？」とチラツと思っただけです。そういうことを質問しないのを分列行進で体に染みこませていたので、質問もしないで疑問をつっこむこともしないで済んでしまったんです。

一人転校してきた方があって竹之内みえこさんというお嬢さんでしたが、その人が平気な顔をして「先生、日本人は天照大神の子孫だと聞きますが、神の子孫だといわますが、片方ではサルが進化したんだという説もあります。どちらが正しいんですか？」とお聞きになった。私は内容よりそういう質問を彼女がしたことに、すごく衝撃を受けて「アッ」と思って名前まで覚えていますが、先生はど

うおっしやったか。先生はちょっと困ったような顔で苦笑して、いい先生だったらしくて怒ったりはなさなくて「そうですね、難しい問題だけど、そういうことはあまり考えない方がいいんじゃないですか。深く考えると天照大神がどんな格好をしていたかになるからやめた方がいいですよ」とおっしゃって。それを「へえ」と思っただけ聞いていて。

後から整理して考えて、私の担任の先生は、わりといい方だったのかなと。「否定するでもなく、叱りつけるでもなく、肯定するでもない。そういう教育のテクニックをもたないと、あの時代はやっていけなかったのかな」と思っただけ、いい先生に恵まれたと思っただけです。ユダヤの選民思想は印象に残っているんです。

体験と記録

小玉 ありがとうございます。三人の先生方の話はつきないところですが、フロアからご質問がございましたらぜひ、どうぞお願いします。

質問 1 国民学校の1年に入った時から卒業まで、びったり国民学校の6年間を過ごしました。学童疎開は縁故疎開と集団疎開があり、私は集団疎開に参加しました。疎開は昭和19年8月21日から戦後も疎開地におりまして、昭和21年3月8日に帰京できました。終戦、敗戦ということでもみな、ワーワーと泣いたんです。昨日まで勝つといわれて。明日にも家に帰れると思うとコロッと元気になる。

私どもは、径書房から『疎開の子ども600日の記録（学童疎開既読保存グループ、径書房、

1994年』でDVDをつくり、第二次世界大戦学童疎開記録集を国会図書館におさめました。私たちが学童疎開を記録して伝承しているのは、平和になってほしいから。こういうことは二度とあっては困るからです。大学附属図書館にもお納めしました。学生さんにどんどん見ていただきたいとおもっています。

小玉 ありがとうございます。今のご発言に関連して、「証言や体験、記録は、ともすれば無視されがちですが、そういう体験に基づくものが歴史学の中でどうやって説得性をもつために、どうすればいいか」という質問もいただいております。山本先生からご示唆をいただければ、とおもいます。

山本 先程お話しました松永さんの論文もインターネットで発見したものです。インターネットは宝庫ですね。著作権の問題とかあるかもしれませんが、魅力的なホームページをつくれれば世界中からアクセスが殺到すると思います。貴重な資料は図書館に寄贈するよりはネットにあげて、みなが見られるようにしたらどうでしょうか。また、資料も見られるようにして、生の資料も、写真にとってスキャンして。非接触型のスキャンナップとかいうのがあるようです。

小玉 資料をどうやって公開していくか。体験とか記憶とか、歴史の資料として教育学の中で、どういう形で拾いあげて議論していくことができるかということを考えていくことも大切かとおもいます。

山本 資料に問いを投げかけて意味をつかみだすことが重要だと思います。公開すれば興味をもつ人は使ってくれて、新たな問いが立てられたり、思いもつかない事項とクロスさせられて、いろいろなことが見えてくると思います。

アメリカの子ども、日本の子ども

宮澤 私は、アメリカと日本の子どもの違い、男女の違いとかを考えていました。アメリカでは第二次大戦中、戦争の当事者で国土が戦場にならなかった唯一の国だと。第二次大戦の受け取り方は、ドイツや日本、イギリスやフランス、戦勝国、戦敗国とのどちらとも違う独特のものがあつたと。ポツダム宣言の時はニューヨークのタイムズスクウェアで大騒ぎして喜んだ。「勝った、勝った、戦争が終わった」と。

ところがベトナム戦争が終わった時、偶然、私はニューヨークにきていて、彼らは喜びを表していたんですけど、何となく重苦しい、盛り上がらないんですね。聞いてみたら「この戦争はアメリカの負けだよ」とみな思っているらしくて。アメリカでは第二次大戦の傷跡より、ベトナム戦争の傷跡の方が深かった。第二次大戦後の日本と第二次大戦後のアメリカを単純に比較することは誤解を生みまます。女性のパイロットも第二次大戦の時から準備して、ベトナム戦争の時には女子が戦場に出てくる、といったふうには、アメリカでは戦後がないみたいなどころがある。第二次大戦が終わったと思つたら、すぐ朝鮮戦争があり、冷戦、ベトナム戦争とずっと戦争にコミットしている。アメリカ自身は戦場にならないが。アメリカの子どもたちは戦争に対して私たちが想像するのとは違う体験をもっているの

ではないかと。

人類はいつも戦争の中にいた

人類史を考えてみると戦争のなかった時代がほとんどない。人類は間断なく戦争を、どこかでしていた。ヨーロッパでも古代ローマ帝国が崩壊した後、ずっとどこかで戦争をやっている。日本の徳川時代の250年は人類史の中で特殊な、日本人の戦争イメージ、第二次大戦イメージは世界史の中で特殊かもしれないと考えることがあります。アメリカは常時、戦争状態にあるんだけど、自分の国は戦場になっていない。南北戦争という内戦を除いては。

『子どもたちの戦争（マリア・オーセイミ著、落合恵子訳、講談社、1997年）』という恐ろしい本があります。作者のマリア・オーセイミという人は実際に東ヨーロッパで少女時代に戦争を経験し、亡命して、自分の体験を思いだして、レバノン、エルサルバドル、モザンビーク、ボスニア・ヘルツェゴビナを訪ねて歩く。子どもたちが戦争をどういうふうにも、現在進行形で戦争をどう体験しているか写真に撮り、聞きとり調査をしている。どの体験も恐ろしいのですが、戦争中毒になる子どもがいるんですね。7歳くらいから慣れてくると怖くなくなると人を殺すことがむしろ楽しみになってくる恐ろしい少年もいる。

デーブ・グロスマン作の『戦争における「人殺し」の心理学（安原和見訳、筑摩書房、2004年）』は、恐ろしいながらも終わりまで読みました。この人はアメリカの兵学校の教授でもある。この研究の動機は人間には他の動物と同じく同種の人間を殺すことに対しては非常に恐れがある。ほん

とは殺したくない。第二次大戦中、アメリカでも兵隊が鉄砲を撃てなくて困ったらしい。「撃て」というと上の方に撃つ。100人いると20人くらいが横に撃つ。狙って相手の姿が見えて目が合うと撃てなくなる。そこで困って心理学者にお呼びがかかる。いかにして敵を殺すことを喜びとするかという心理学メカニズムを研究して、その成果がベトナム戦争に出てきて、95%が人を殺すために銃を使えるようになったと。心理学のせいだけではないんですけど。

先ほどのオーセイミの本の中で恐ろしいのは、最後に戦場の舞台として選んだのがアメリカのワシントンだということです。そこでは日常の暴力、子どもが子どもを殺し合う、思春期の子どもたちが麻薬をほしいために殺すとか。殺すことが快楽になって殺すために殺す。それはマスメディアの暴力映画のせいだという解釈をしている。時々、予告編でアメリカの暴力映画を見ると、すごい音響で耳栓をしないと聞けないくらいの大音響で、殺しの場面が、これでもか、これでもかと。目をつぶるんですけど。あれを毎日見ていると苦痛ではなくなる。中毒になるという事例がある。そういうことがあるにもかかわらず、戦争ゲームとかをやめない。子ども世代が互いに殺し合うことを通してアメリカ文明は破滅するのではないかとこの予言までしている恐ろしい本です。

私の専門は教育学で、こういうテーマはやったことはいませんが、人類はいつも戦争の中にいたんだと思います。戦後というけど、いつも戦前で、常に子どもたちに何らかの形で強い兵隊になることを、暗黙のうちに用意して教育をしていたことがあるのではないか。教育史にはそんなことは書いてない。戦争のことも。平和な時代のギリシャ、中世、ルネッサンスでも、平和状態だけ選んで書いているとしか思えないくらいで、戦争のための準備を、いつのまにか教育がやっていたという史実

は全然ないんですね。そのへんのことを一体どう考えればいいのかなど、小玉さんからこのテーマを言われた時からずっと考えさせられていて困っています。

一人ひとりの課題として

小玉 まだまだお話はずきないところですが、大変残念ですが、時間となつてしまいました。それでは、最後に、本田先生からお話をいただいて終わりにしたいと思います。

本田 こういうテーマの会だと必ず、「戦争はよくない」と最初から結論が出ていて「子どもを戦争から守る」「子どもを戦争に巻き込まないためにはどうしたらいいか」という方法論を考える。ことばの上だけで、そういうものを出してシャンシャンと終わるのが多いように思うんです。どうもそういう会はあまり意味がないんじゃないかと。世の中には溢れています。今日のように結論がなかなか出ない、どうすれば戦争をなくせるかということが出てこないところが、逆に意味があつて、そこで出てきたことを一つひとつ丁寧にほり下げることで、もしかしたら人間がわかるかもしれない。

私はあえていわなかつたんですが、子どもの頃、アメリカの飛行機に追いかけられたことがございました。急降下してくる音がしたので見上げたら、このへんにアメリカの飛行機や艦載機が見える。艦載機は爆撃機の護衛についてくる小さな戦闘機です。航空母艦に乗ってくるので艦載機というんですが、艦載機がキューと急降下してくる。機関銃をダーツと撃っている。「怖い」と思いませんでした。なんかしらないけど、「あら大変」と思つて、足が速いもんですから一生懸命逃げたんです。そのア

アメリカの飛行機もゲーム感覚で狙っただけで、その後、また上空に上がってしまってしまいました。橋の下に逃げ込んで辛うじて終わったんですが。

爆撃機は爆弾を落とすことで使命を果たせる。護衛についている戦闘機は日本の戦闘機が上がってこなければ空中戦をやる必要はない、何も仕事がない。仕事がなくて帰る時にゲーム感覚で人を殺してみたくなったり、のんきに歩いている人を見たら、その人を狙ってみたくなったりするんだなと思つて、鬼畜米英とも思わずに「しょうがないな、なるべく目立たないようにしなきゃ」と思つた記憶があります。そういうことをお話すると皆さん、びっくりして「アメリカ兵でもゲーム感覚で人を殺すの？」と。アメリカ兵であれ、日本兵であれ、ゲーム感覚で異常事態におかれて自分がすることがないという場合には余っている弾をどうやって使おうかと。

それをどう考えるか。人間は基本的に暴力的なものであるといつてしまえば身も蓋もないんですが、あるいは別なことを考えるか、それが私たちに与えられている課題かなと思つたりします。お二人の先生方のお話を伺うことで大変気づかされることでしたが、その中から皆さんも一つか二つ、小さなテーマをみつけて、簡単に結論をえようとなさらないで、ちょっと掘り下げてくださると何か新しいものが見えてくるかもしれないということを考えました。今日はいろいろと面白いお話を、ありがとうございました。

小玉 それでは、鼎談を終わりにしたいと思います。本日は3人の先生方、本当にありがとうございました。フロアのみなさまもご参加いただき、本当に、ありがとうございました。

7. 会場から寄せられたその他の質問・感想

鼎談では、会場からたくさんの方の質問や感想をいただきました。本当にありがとうございました。質問や感想をおよせくださった方のお名前は割愛させていただきますでしたが、大変貴重なご意見をいただいたので、ここに掲載することとしました。本田先生からご質問へのコメントをいただきましたので、あわせて掲載させていただきます。

○戦後の「民主的」に変化した学校の中で、どのような体験が印象的でしたか。また、大人の態度が変わったことにどのような不信を覚えましたか。証言、体験、記憶はともすれば無視されがちな対象と思われるがちですが、そのような体験に基づく歴史学が説得性を持つためにはどのようなことができると思われますか。同時に、無視されがちな子どもたちの声を教育学はいかにすくい上げるべきだと思われませんか。

○山本先生の「戦争児童世代」という視点はとても興味深いです。それを受けて、戦後の本田先生、宮澤先生が、思春期・青年期（後期子ども時代）にどのような戦争体験されてきたかを聞いてみたいです。

○「戦前」と「戦後」はどう違うのでしょうか。今、生きている時が「戦前」でないとは言いきれない

いように思います。

○天皇の赤子として死ぬべきだというのも恐ろしいが、死がひたすら忌み嫌われる現代に生きるのも何やらそら恐ろしい感じがします。「戦争児童世代（山本先生）」から見て、現代日本の子どもたち、その置かれた環境について危機感を覚えることはないでしょうか？

○3人の先生に聞きたいこと

留学生です。現在のグローバルの時代において、世界和平のため、子どもに戦争の教育を行うことはどう考えていらつしゃいますか？ 先生方のお話を聞いて、戦争体験のない自分の戦争イメージを形成することに役立ちました。それでもう一つ聞きたいのですが、戦争体験のない若者はどのような視点で歴史を捉えた方がいいのでしょうか、国々の愛国心教育が実施されている背景をふまえ、対戦国の戦争歴史を客観的な目で理解できるため、どのような努力が必要なのでしょう？

○つい先ごろ、東京から学童集団疎開に参加した子どもたちの中で戦災孤児になった人たちはどのよううに生き抜いて来たのだろうか、という疑問が、学童疎開に関する集会でだされてきました。地元をはなれて、親元をはなれているうちに、都会の空襲で親、家族を亡くした子どもたちは大勢いると思いますが。私自身たいへんに興味あるテーマです。

○質問というより感想です。私の父は昭和7年生まれ。生後3ヶ月の時に実父が戦病死し、実母は実家に返され、「農家の長男」として生家に1人残されて育ちました。父がいつも「国のやることはうたがってかかれ。国が本当に国民のためを思っているなら、戦争などしないはず。国は必ずしも国民のためになることをしない。新しい政策は、まず疑ってかかれ」と言っていました（今も言い続けています）。そのことを思い出し、戦争が子どもに与える影響について3人の先生方のお話を非常に教示深くうかがっていました。ありがとうございました。

○「教えられていることが真であると受け入れる体質が作られた」という本田先生のお話や「特攻隊となることを考えた」という宮澤先生のお話がありましたが、ある意味でその洗脳はいつ解けたのでしょうか。

○天皇制のもとでの日本の子どもと、ナチスのもとでのドイツの子どもに違いはあるのでしょうか。

○戦争を過ごした子ども達が、教育やしつけも受けていないのに「強い」ということをお聞きして、びびくりしました。もっと詳しくお話しをお聞きしたいと思います。

○戦時中の教練で「教えられたことが真である」と身体的に刷りこまれたとのことでしたが、戦後、1970年代生まれの私たちにとっても、小学生くらいの子どものころには、それほど大人の言葉

を疑うという発想はなかったと思います。先生方からみて、戦後、現代の子どもたちの「教育を受ける側の姿勢」には何らかの特徴、変化など、お気づきになる事柄はありますか？

○戦時中、戦争ごっこに興ずる男の子は多かったと思いますが、戦後GHQの方針や平和教育では、戦争ごっこが禁止されたと聞いたことがあります。ドイツやほかの外国ではどうだったのでしょうか？ また、戦争中の戦争ごっこが、戦後、何かに形を変えて存続しているようなことがあるのでしょうか。

○本日はありがとうございます。戦争中に受けた不幸は教えられたことは全て真であるという体勢がつくられたということでしたが、戦後は一転して全てを疑うという体勢になったというように本田先生がまとめて下さいましたが、全てを疑うという構えで、先生方はどのような青年期を過ごされたのでしょうか。具体的なエピソードでも象徴的な内容でもお聞かせ頂ければ、本日のテーマ、「今、私たちは何を考えることが求められるのか」の手がかりになるのではないかと思います。いかがでしょうか。

○約30年間、学童集団疎開について記録・保存・伝承をしています。日本の、世界の平和を願って戦時下の生活を伝えたいのですが、どのような方法があるのでしょうか？ 『エリプス（NPO法人お茶の水学術事業会発行）』で「絵日記による学童疎開600日の記録」の記事を載せてください

ました。マンチェスター大学で「日本の子ども1925～1945」の行動を調べていらつしやるグループのケーブ先生に認められ、目下マンチェスター大学で私達の絵日記を基にしたA3版コピーをパネルにしたものを展示するお話をいただき進めています。山本先生の孤児に関する録画（VHS）を持っています。

○地域や学校の違いという話がありましたが、動因や疎開など政策によつて生活（ときに生死も）左右された面があつたと思います。そういうリアリティはあつたのでしょうか。また、そういうマクロな動向と個別の体験をどう歴史学は記述していけるだろうかと常々思っているのですが、何かヒントがあれば教えていただければ幸いです。

【第二部】

鼎談に寄せて

1. 本田 和子氏 特別寄稿 質問に対する私見

興味深い質問を、沢山頂だいたしました。ありがとうございます。ただ、それが私に対するものなのか、どれにお答えしたらよいのか、少々迷いましたので、全体に対しての私見を申し述べさせて頂くことにしました。

戦争体験を語ること

私の役割は、私としての「個人的戦争体験」をお話することでした。ただ、冒頭に申し上げたとおり、体験談に関しては、私はかなり懐疑的で、記憶というものの特性からそのままに信じられないと思っています。何故なら、記憶には、隠蔽・脱落・修正などの特性があり、その結果として、当時の出来事をそのまま伝え得ないことがあります。そこで、戦争談に関して他の方たちから山のように語られている悲惨な体験談は、さておき、私として、強く印象づけられたことだけを話しすることにしました。

こんな個人的体験談ではなく、よりマクロな問題をというご指摘に対しては、「集団疎開」のこと、「津島丸」のこと、あるいは「国民学校令」と改変された「国民学校のカリキュラム」あるいは「国民学校の教育」に関しては、それぞれの分野で既に考究がなされているわけですから、私という「5年生の子ども」が感じた一番大きな変化として、「分列行進」のお話しをしたわけです。ただ、私も、

公的な記録ではなく、「個人的な体験とそれに基づくエピソード」は、「歴史の上でどんな意味を持つのか」「歴史学はどう位置づけるのか」という質問を山本先生に提出しているわけですが、山本先生のお答えをよくお考えになってはいかがでしょうか。

戦争の悲惨について

私の体験談は、「戦争の悲惨さ」を伝えていないとお感じになったことと思います。終わった直後に、「もっと悲惨な体験がある」とご注意くださった同世代の方がいらしたのですが、私自身も「悲惨」と言えば言えそうな体験もないわけではない。たとえば、「親しい知人の家で、母親の留守中に子ども3人とお手伝いさんが防空壕に入って直撃弾を受け一瞬に爆死したこと」、私自身も「アメリカの戦闘機の機銃掃射を受けて逃げ回ったこと」「疎開の途中で列車が空爆を受け、列車を降りて線路上を歩いていた時、アメリカ機の機銃掃射を受けて目の前で老人が即死したこと」あるいは、「空爆の翌日、まだ焼死体の片付けてない道を学校まで歩いて行ったこと」などなどのいかにも凄惨な体験もあったことはったのですが、そういう体験は、他の書物などでも十分に伝えられているようです。それに、私は「感情がマヒしていたのか、割りと淡々と受け止めていた」ように記憶しているものから、あえてお話ししなかったのです。

それに、子供ってそういうところもあるのではないかと思っています。『禁じられた遊び（ルネ・クレマン監督、フランス、1952年・日本公開1953年）』というフランス映画（名画）がありました。そのなかで、両親を敵の飛行機に射殺された女の子が、両親の遺体に取りすがるのでな

く、泣きわめくのもなく、ただ生き残った子犬を抱いて淡々と歩み去る画面がありました。思わず、「うまい」と手をたたきたくなるようなシーンでした。

そこで、当時の一人の子供として、そういう話し方でお伝えしてみました。

疑問を押し殺すということ

低年齢の子供にとつて、「教えられることは真である」という受け止め方は、戦時下と現代を問わず、子供に共通ではないかというご意見は、その通りだと思います。ただ、「先生の教えはその通り」と漠と受け止めるのと、「これ以外の考え方は、あつてはならない」という強固な信念として受け止めるのと違いでしょうか。私が「チラとわいた疑問も押し殺して忘れ去った」と言ったのはそんな意味でした。

戦後の大学と自由

戦後の私は、様々な本を読みあさりしました。「××」という「伏せ字のない本が読める」ということは新鮮でした。戦時中の本は、当時として都合の悪い箇所は、「××」（いわゆる伏せ字）で隠してあったのです。小学生の私は、「その時、アンヌは、××だった」というような読み方をしていたわけです。だから、伏せ字のない本は、とても有り難かった。高校時代は、よく授業をサボって、図書館で本を読んでいました。

あの当時の青年期の過ごし方は、どの高校、大学に入ったかでかなり違うように思います。（もっ

とも、現在もそうかもしれません。高校時代は目茶苦茶に自由でした。自分の時間割は自分で作りました。たとえば、大学の受験科目との関係で、高校二年で履修するものと三年で履修するものを区別したり、必修以外は、ほとんど捨ててしまったり、というように。アメリカの教育使節団の一人が、「この学校は、アメリカよりも生徒主体ですね」と驚いたような時間割でした。ただ、そんな教育は、私の卒業後は、変わってしまったようです。当時は、文部省も何をどうしたらよいのかわからなかったでしょう。

大学は、お茶大でしたから、教養よりも専門重視でした。一年次から専門のゼミがあったりしましたので、「専門以外の本を読んだり、ゆっくりともの考えたり」する余地のない学生生活でした。それに、資料は、ドイツやフランスのものは入らず、アメリカ一辺倒の時代でしたから、もっと資料はないのかとあちこち歩き回りました。といっても、あまりよくわからなかったので、文部省や厚生省に行つて素朴な質問を投げかけ、お役人たちを困らせたりしていました。そして、そんなお役人が、いつのまにかお茶大の教員になっていたりするそんな時代でした。

それでも、私自身の乱読は直りませんでしたので、「雑学者」などと呼ばれたりしていました。「戦時中の思考傾向がどう変わったか」という問いには明確にお答え出来ません。教養学部のある東大を、一寸だけうらやましいと思ったりしましたけれど。でも、四年生大学に進学する女生徒は3パーセントという時代でしたから、余り文句も言わず、お茶大の教育に適應していたように思います。

当時（昭和25、6年当時）は、お茶大で自治会活動が盛んでしたが、「カトリック研究会」「プロテスタント研究会」「キリスト教古典読書会」など、西欧文化の基礎を知ろうとする活動や、「唯物論研

研究会」「ソビエト教育研究会」なども盛んだったように覚えています。海外の文化に目を閉ざすことだけを求められた戦時下に比して、何でも自由に知ることが出来る時代になったのだと漠然とした期待を持たされたように思います。

あらためて「戦争と子ども」

最後に、私は、京都駅で戦災孤児に取り囲まれて、初めて「戦争と子供」の問題を考えたと申し上げました。その時は、「戦争とは、子供にとってこんなにも大変なことだったのだ」という驚きと、「日本は、本当に負けたんだな」という敗北感でしたが、いま、大人の言葉で整理しておきましょう。

「子供は、戦争に直面したとき、自身の生命を守ることが出来ない」

「子供は、自分の財産（子どもにとっての財産とは両親・兄弟姉妹・友人など）を失う危険に不断にさらされる」

「子供は、自分自身の将来を、自由に描く機会を与えられない」

以上、個々の質問にお答えするというよりも、言葉足らずだったあの日の発言の補足のようにになりました。悪しからず。

2. 宮澤 康人氏 特別寄稿

教育学の〈戦前〉責任とシンポジウム「子どもと戦争」によせて

幼児教育史学会大会（注）の直前に、プレシンポジウムともいうべき鼎談「子ども・戦争・歴史」に招かれて発言しましたが、そのあと、質問をたくさんいただきました。

その中に、私が、戦中の少年時代（国民学校3、4年生のころ）に「特攻隊に憧れ、自分の命を捧げる気持ちになった」と語ったことについて、「その洗脳はいつ解けたのですか。戦後の正反対の教育のなかで、どのような青年期を迎え、自我形成したのですか」というのがありました。

正直なところ、答えは、私自身、まだ見つけていません。

確かに、上からの、教訓的な言説に反発する、何事も疑ってかかる、権威を拒む、という思考方法が、戦中、戦後体験を通して強くなりましたが、他方では、自己を超える、より大きなもの、崇高なるものを求め、そのために自己放棄したい、という心情も、いまだに魂の奥底に深く残っていると感じます。これは世代的、というより個人の性格も関わっているかもしれません。

質問にはまた、「戦中に男の子が熱中したといわれる戦争ごっこが、戦後はGHQによる禁止と、教育の平和主義の文化状況のなかで、戦後、何かに形を変えて存続しているようなことがあるのでしょうか」というのもありました。

たぶん、暴力シーンだらけのゲームを始め、いじめ、各種スポーツ（とりわけ格闘技的なそれ）などは、形を変えた戦争ごっこではないか、と思います。私自身、野球やサッカーの国際ゲームを観戦

していると、侍ジャパンに一体化して、いつのまにか、あれほど、警戒するようになったはずのナシヨナリスト、愛国者どころか排外主義者（シヨビニスト）になつて、気が付きます。けれども、これは、戦中教育のせいではなく、むしろ、人間本性に内在する、暴力性・破壊本能（タナトス）と、自分に身近な同類に抱く親密感情（エロス）との結合に起因するとも考えられます。

報告者、寺岡聖豪さんの長田新の評価をめぐつてですが、『原爆の子』によって戦後責任を果たそうとした長田の志を評価する視点には同意します。さらに、戦中の長田の、戦争協力の発言を糾弾することに弟子筋が、ためらうことも理解できます。私の師匠筋の、勝田守一、海後宗臣、宮原誠一たちも、何らかの形で、戦争に加担する言説を書き残しています。その責任を追及すべきでないとは言えません。しかし、問題の中心は、戦中責任の追及より戦後責任の取り方、とりわけ、いわゆる逆コース以後に、どういう姿勢をとつたか、ということにあるのではないかと思います。むしろ、〈戦前〉責任を問われるのは、その弟子筋の私たち以降の世代です。何故なら、いまこそ再び、戦前からです。戦争批判を、知識人、国民一般の課題として重視することに並んで、教育学、とりわけ幼児教育学独自の研究課題にするには、どのように問題を設定したらいいか、それをしっかり考える必要があると思います。被害者としての子どもの悲惨な姿を歴史的に記述するだけでは十分ではないと考えます。人間本性にある暴力性と、他方で、人を、そして、生き物を殺すことに罪障感を抱く、という矛盾する本性の両面を理解しつつ、特に、暴力性とナシヨナリズムが結合しやすいことを警戒する感性を私たち大人自身がどうやって身に付けるか、それを幼い世代にどう伝えられるか考えぬかねばなりません。難しい課題です。難しさは、すでにフレールベルに遡ります。幼な児たちの花園を夢見たフレール

ベルが、他方で、彼自身が勇敢な兵士であり、彼の幼児教育の狙いには、将来の強い兵士を育てる母親を育てる、という目的があった、とシユプランガーから指摘されたところにも現れています（湯川嘉津美コメント参照）。

戦争に関連した文献のなかで、私が強く心を惹かれたのは、中沢新一と太田光の対談『憲法9条を世界遺産に』（集英社新書）です。もし未読でしたら、是非一読をおすすめします。前に、モンゴル共和国を訪ねたとき、その国の憲法に、「くに」を愛しすぎてはいけなく、という一項がある、と聞いて驚き、感動した覚えがあります。モンゴル人は「くに」を愛しすぎる傾向があるからというのです。確認はしていませんが、そういう思想が明示されていると聞くだけで心強く思います。日本でも、その後、「憲法9条にノーベル平和賞を」という独創的な思想と行動が生まれています。

こういう思想を、教育のレベルで、どのように世界的、人類史的に位置づけ、意味づけることができるか、それは、幼児教育史の根本課題の一つではないでしょうか。

【参考文献】

柄谷行人『戦前』の思考』1994 文藝春秋

野田正彰『戦争と罪責』1998 岩波書店

吉本隆明『私の戦争論』2002 ちくま文庫

グロスマン、D.『戦争における「人殺し」の心理学』安原和見訳、1998 ちくま学芸文庫

(注)

本稿は、幼児教育史学会の会報第19号に宮澤氏が寄稿された文章の再録である。

本鼎談後の2014年12月6日に、第10回幼児教育史学会大会がお茶の水女子大学で開催された。この大会シンポジウムのテーマが「子どもと戦争」であり、その時の登壇者が、本文中に言及されている寺岡聖豪氏（福岡教育大学）の他、米田俊彦氏（お茶の水女子大学）、湯川嘉津美氏（上智大学）であった。このシンポジウムの記録については、幼児教育史学会編『幼児教育史研究』第10号に掲載されているので、あわせてご覧いただければ幸いである。

（編集部付記）

3. 写真資料で見る「戦時下の保育」 「戦時下の保育」東京女子高等師範学校附属幼稚園資料特別展

鼎談にあわせて、2014年11月21日～12月6日にかけて、お茶の水女子大学歴史資料館において、「戦時下の保育」と題する特別展を開催した。次頁以下の資料は、その時の展示物に関するパンフレットの再録である。作成は、お茶の水女子大学リサーチフェローの松島のり子と大学院生織田望美、および小玉が責任者として担当した。

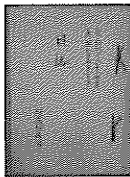
展示は、お茶の水女子大学図書館・歴史資料館、ならびにお茶の水女子大学附属幼稚園に保存されている貴重資料の実物展示と写真によるパネル展示から構成された。戦時下の国旗や、保育実践記録、また、募金によって寄贈された戦闘機の写真など、興味深い資料の展示をおこなうことができた。

資料の展示を許可していただいた図書館、歴史資料館および、附属幼稚園のご協力に心から感謝申し上げます。

(文責 小玉亮子)

東京女子高等師範学校附属幼稚園と戦争

戦時下の「日誌」には、日増しに悪化していく当時の幼稚園を取り巻く状況が記録されている。太平洋戦争が開戦した1941年12月8日には、「本日 日米戦争始まり」、「誓って一億結束勝たざるべからず！」と記されている。



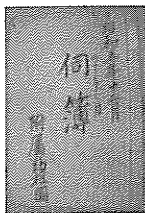
「日誌」



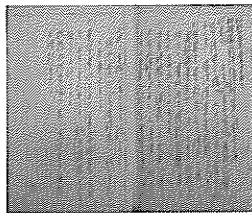
「記録通知」

1943年6月には、「送り迎えの方の服装について」注意喚起の通知が配布された。たとえば、「日傘、夏肩掛、帽子」や「踵の高い靴」などは、「非戦時的華美」であり、戦時下にそぐわないとみなされた。子どもの「教育上の影響から」も、身につけることを控えるよう伝えられている。

1944年5月には、幼稚園から「幼稚園戦時臨時措置に関する件」について師範学校長等に何を出している。在園中警報が発令された場合は園児を帰すこととした一方で、保育時間の延長や「夏季保育」の実施も項目に含まれていた。

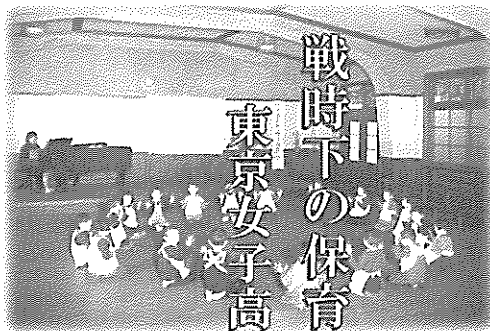


「伺簿」



幼稚園戦時臨時措置に関する件

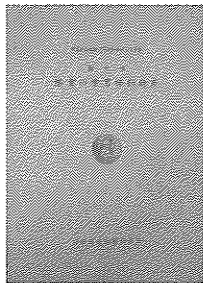
1945年3月10日、東京大空襲の日にも、登園時間を遅らせ3名の幼児を迎えるが、「警報=テ直に帰宅」したことが記録されている。



戦時下の保育実践

1935年7月、日本幼稚園協会から『系統的保育案の実際』が刊行された。これは倉橋惣三と附属幼稚園の保母らによる共同研究の成果に基づくもので、日本における初めての体系的な保育案（幼稚園カリキュラム）とされている。

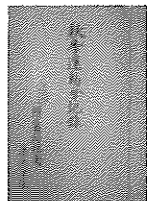
その後戦争の拡大に伴い1941年7月、時局の変化に対応した保育内容の刷新を企図して刊行されたのが『改訂版 系統的保育案の実際』である。改訂版の序文には「我国幼稚園保育は、現下国民教育上最大の任務を自覚してゐる」、「保育案も亦その最重要なる一つとして、茲に此の新版が、皇国保育界に貢献するところあらんことを心より希うて巴まない」など、初版にはなかった記述がみられる。



『改訂版 系統的保育案の実際』

「秋季運動会記録」には、東京女子高等師範学校運動会の記録がまとめて保管されている。附属幼稚園に現存する最も初期の「運動会次第」は1929年のものである。

1937年になると、開会式に「宮城遙拝」および「明治神宮遙拝」、閉会式には「万歳三唱」の項目が加わり、さらに1942年には会の名称がそれまでの「運動会」から「体錬大会」に、「運動種目」は「体錬種目」へと変更された。



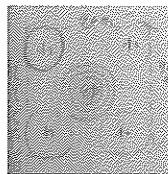
「秋季運動会記録」

翌1943年、「警報発令時は延期」として予備日が設けられる中、戦時下最後の大会が開催された。当日は「前線の将兵におとらめ鑑後学生として錬成の一日をすごした」と報告されている。

保育の中の国旗

戦前、運動会は東京女子高等師範学校全校で行われていた1932年、幼稚園の出場種目に「日の丸行進」が加わった。小学校と連合で出場する種目であった。

「秋季運動会記録」には、「日の丸行進」の実施に向けた図が記録されている。縦横90mの四方に小学生が円を成し、幼稚園児は「赤き日の丸になるやうに」、中心で「赤帽子、赤旗」を身につけ、同心円状に行進する配置となっている。

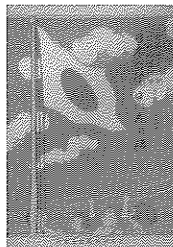


「日の丸行進」図



1943年秋大会「日の丸行進」

1937年9月29日には「国旗掲揚の式」が挙行された。式当日にも斉唱されたという「日本の旗 日の丸の旗」の譜面および解説は、翌10月日本幼稚園協会より刊行されている。雑誌『幼児の教育』に掲載された広告によれば、「此の刊行によつて得た金額は、実費を除いて悉く国防費に献金致したい」とされ、本資料の「一冊の御購買は即ち同時に国防献金となる」と記されている。



『日本の旗 日の丸の旗』

特別展 展示資料一覧

資料名	作者	制作年代	所蔵者
東京女子高等師範学校附属幼稚園と戦争			
「何簿」	附属幼稚園	1930年12月 -1945年3月	附属幼稚園
「記録通知」	附属幼稚園	1940年11月 -1945年4月	附属幼稚園
「日誌」	附属幼稚園	1940年4月 -1942年3月	附属幼稚園
「日誌」	附属幼稚園	1943年4月 -1944年3月	附属幼稚園
送り迎への方の服装について 急告	附属幼稚園 附属幼稚園	1943年6月 1943年9月	
「日誌」	附属幼稚園	1944年4月 -1950年3月	附属幼稚園
戦時下の保育実践			
「秋季運動会記録」	附属幼稚園 運動会係	1927-1943年	附属幼稚園
昭和四年 東京女子高等師範学 校運動会次第	東京女子高等師範学校	1929年	
昭和十二年 東京女子高等師範 学校運動会次第	東京女子高等師範学校	1937年	
昭和十七年 東京女子高等師範 学校体育大会次第	東京女子高等師範学校	1942年	
『系統的保育案の実際』	日本幼稚園協会	1935年7月	附属幼稚園
『改訂版 系統的保育案の実際』	日本幼稚園協会	1941年7月	附属幼稚園
海軍東人用具	THE MODERN TOY LABORATORY	不詳	歴史資料館
保育の中の国旗			
「御国旗」（倉橋記）	倉橋惣三	1937年9月	附属幼稚園
『日本の旗 日の丸の旗』	日本幼稚園協会	1937年10月	歴史資料館
「秋季運動会記録」	附属幼稚園 運動会係	1927-1943年	附属幼稚園
「日の丸行進」写真	東京女子高等師範学校	1943年10月	お茶の水女子大学
旗7枚 日の丸に「幼」の文字 かき十字 五色旗	不詳	不詳	歴史資料館
日本幼児号			
戦国第四四七一号（日本幼児 号）【艦上戦闘機】海軍省	海軍省	1944年	附属幼稚園

お問い合わせ

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学 小玉亮子研究室気付
お茶の水女子大学 幼児教育史研究会
(小玉亮子・松島のり子・織田望美)

表紙写真：東京女子高等師範学校附属幼稚園「記念帖」（1943年3月）より

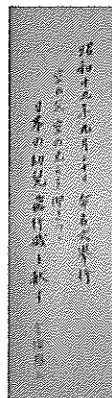
日本幼児号

1943年11月、雑誌『幼児の教育』に「日本幼児飛行機献納貯金の提唱」と題する記事が掲載された。これは「銃後からの補給を何よりも待ってゐるのは飛行機です」、「今や、その大切な飛行機の製作に、国を挙げての金力がつくされてみます。幼児達の心にもそのことが響いてみませう。その心を実現させ具体化させるために、日本幼児飛行機献納貯金を提唱します」として、日本幼稚園協会が「各園からの、献金の御寄託を受けて、幼児達の総意を陸海軍に献納表明」しようと取り組まれたものである。

その後、複数回にわたる献納金寄託の呼びかけを経て海軍省に献納されたのが、艦上戦闘機「日本幼児号」である。1944年9月、同誌に掲載された「艦上戦闘機『日本幼児号』献納」には、「斯くて、今まで直接には戦争に参加することのなかつた幼児が、この機を通して堂々と参加するのです」と記されている。



戦国第四四七一号（日本幼児号）
【艦上戦闘機】海軍省 表面



裏面

戦闘機の命名式において、海軍大臣からの感謝状と日本幼児号の大写真が授与された。写真の裏には倉橋による直筆の書が記されている。

<第8回 ECCELL 子ども学シンポジウム 案内チラシ>



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

第8回ECCELL子ども学シンポジウム

鼎談

「子ども・戦争・歴史」

本田 和子（お茶の水女子大学元学長）

著書：『それでも子どもは減っていく』（筑摩書房、2009）
『異文化としての子ども』（紀伊國屋書店、1982） 他

宮澤 康人（東京大学名誉教授）

著書：『<教育関係>の歴史人類学——タテ・ヨコ・ナナメの
世代間文化の変容』（学文社、2011）
『大人と子供の関係史序説——教育学と歴史的方法』
（柏書房、1998） 他

山本 秀行（こども教育宝仙大学学長）

著書：『ナチズムの時代』（山川出版社、1998）
『ナチズムの記憶——日常生活からみた第三帝国』
（山川出版社、1995） 他

2014年11月21日（金） 13:20～14:50

お茶の水女子大学 共通講義棟2号館2階201室

（東京メトロ丸ノ内線 茗荷谷駅 徒歩7分／有楽町線 護国寺駅 徒歩8分）

一般公開・事前申込不要

お問い合わせ：nyuyo.ji-info@cc.ocha.ac.jp（ECCELL事務局）

定員：300名

共催：文部科学省特別経費「乳幼児教育を基盤とした生涯学習モデルの構築（ECCELL）」

科研費基盤研究（C）「20世紀前半のドイツにおける幼児教育の制度化と家族に関する社会史的研究」

後援：幼児教育史学会

＜お茶大子ども学ブックレット バックナンバー一覧＞

号	タイトル（講演者）	※大会名（開催日）：発行年月
1	子育て力の危機と創生～エンパワーメントの視点から～ （牧野カツコ氏、星美和子氏）	※第1回お茶大 ECCELL 子ども学シンポジウム（2011.3.13） 記録：2012年9月発行（1刷）、2013年3月発行（2刷）
2	今、子どもが育つ環境を考えるⅠ ～『ナージャの村』本橋監督をお迎えして～ （本橋成一氏、小玉亮子氏、榊原洋一氏）	※第2回お茶大 ECCELL 子ども学シンポジウム（2011.11.19） 記録：2013年3月発行
3	絵本の挿絵について（黒井 健氏）	※第5回お茶大 ECCELL 子ども学シンポジウム（2012.6.23） 記録：2014年3月発行
4	これからを生きる子どもたちへ ～津守眞氏からのメッセージ～ （津守 眞氏、高橋洋代氏）	※第6回お茶大 ECCELL 子ども学シンポジウム（2012.10.13） 記録：2014年9月発行
5	日本の保育現場における“遊び”の意味 （榊原洋一氏、河邊貴子氏）	※ ECCELL 主催第5回お茶大保育フォーラム（2014.6.29） 記録：2015年3月発行

【バックナンバーの資料請求について】

上記バックナンバーをご希望の方は、必要事項をご記入のうえ、以下 ECCELL 事務局までメールか FAX でご連絡下さい。

一冊 500 円（送料別途負担）にて郵送させていただきます。

＜資料請求先＞

ECCELL 事務局（ブックレット担当）

E-mail：nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

Tel&Fax：03-5978-5949

お茶大子ども学ブックレット Vol.6

2015年12月26日 発行

発行 国立大学法人特別経費事業「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」(**ECCELL**)

浜口 順子

編集 安治 陽子・猪股 富美子・小玉 亮子

連絡先 〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学本館335室

TEL&FAX 03-5978-5663

E-mail nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

URL <http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji>

印刷 光写真印刷株式会社